

# 概況

[歌舞伎]

## 2022年の歌舞伎界

小玉祥子

2020年に始まったコロナ禍は2022年になっても続いた。各劇場は消毒液を入り口に置き、観客にマスク着用を求めるなどの対策を取りつつ興行を行ったが、依然として感染拡大は収まらず、公演の中止、俳優の休演や代役も目立つ1年となった。

歌舞伎座では11、12月の2か月続きで、「十三代目市川團十郎白猿襲名披露」が行われた。2020年5月から同年7月まで3か月続きで催されるはずが、コロナウイルス感染拡大のために延期となっていた。同劇場での公演は2か月になり、2021年には中村吉右衛門が逝去するなど当初の予定とは演目や配役も変わった。同興行では團十郎の長男が八代目市川新之助を名乗り初舞台を踏んだ。まずはそこから始めよう。

両月とも團十郎家の「家の芸」である「歌舞伎十八番物」が主体になった。11月の「襲名披露」は「吉例顔見世大歌舞伎」。昼夜2部制で、昼は「芝居前」の「祝成田櫓賑」に続き、八代目新之助初舞台の「外郎売」。新之助が外郎売実は曾我五郎で早口言葉の言い立てを達者に聞かせた。菊五郎の工藤を筆頭に左團次の朝比奈、魁春の大藏の虎、雀右衛門の舞鶴らが周囲を固めた。最後が團十郎襲名演目の「勧進帳」。團十郎の弁慶、幸四郎の富樫、猿之助の義経。同世代の3人の息が合った。

夜の序幕は「矢の根」。幸四郎の曾我五郎、巳之助の十郎。「口上」を挟んで最後が襲名演目の「助六由縁江戸桜」。團十郎の助六、菊之助の揚巻、松緑の意休、魁春の満江、仁左衛門の門兵衛。白玉は梅枝(7～20日)と玉三郎(22～28日)。團十郎が容姿を生かしたさっそうぶりを示した。

12月の「襲名披露」は「十二月大歌舞伎」。昼夜2部制で、昼の序幕が「鞘當」。松緑の不破、幸四郎の名古屋で猿之助と中車が交互に留女、留男を勤めた。中幕が「京鹿子娘二人道成寺」。菊之助と勘九郎の花子。團十郎が大館左馬五郎で荒事の「押戻し」を見せた。最後が「毛拔」。新之

助が桑寺弾正の初舞台狂言。梅玉が春道、雀右衛門が巻絹、芝翫が万兵衛、錦之助が民部、右團次が玄蕃で周囲を固めた。

夜の序幕が「口上」。中幕が舞踊の「團十郎娘」。團十郎の長女、市川ぼたんのお兼。最後が「助六由縁江戸桜」。團十郎の助六、揚巻は玉三郎(5～15日)と七之助(16～26日)。意休は彌十郎(病気休演で15～23日まで松緑)、白玉は菊之助(5～15日)と梅枝(16～26日)、満江は吉弥(5～15日)と玉三郎(16～26日)。

1月は「寿初春大歌舞伎」。3部制で1部の序幕が「一条大藏譚」の「檜垣」「奥殿」。勘九郎の大藏卿、扇雀の常盤御前、獅童の鬼次郎、七之助のお京。14日は公演中止で、15～22日まで扇雀と七之助が休演で歌女之丞が常盤御前、京蔵がお京を代わった。次が「祝春元禄花見踊」。獅童の真柴久吉、勘九郎の山三、七之助のお国。獅童の長男小川陽喜が初お目見得。

2部の序幕が「春の寿」と題して舞踊2題。「三番叟」で梅玉の翁、芝翫の三番叟、魁春の千歳。27日の千穂染のみ芝翫が休演し、幸四郎が代わった。続く「萬歳」は又五郎の萬歳、鴈治郎の才造。続いて「艦清の夢」(山田庄一演出)。幸四郎の艦屋清吉。金策に窮した清吉の夢の形をとり、「忠臣蔵 五段目」や「吉田屋」などのパロディーが展開される。幸四郎が和事味を發揮。

3部の序幕が「岩戸の景清」。松也の景清を中心に若手花形が出演。14～21日は松也の休演で猿弥が代演。続いて「義経千本桜 川連法眼館」。猿之助の佐藤忠信、佐藤忠信実は源九郎狐。コロナ禍による演出変更で自粛されていた花道の上を飛ぶ宙乗りが再開された。雀右衛門の静御前、門之助の義経。

2月は「二月大歌舞伎」。3部制で1部の序幕が「元禄忠臣蔵 御浜御殿綱豊卿」。悠然とした梅玉の綱豊と生真面目さが際立つ松緑の助右衛門が好対照。魁春の江島、東蔵の新井勘解由、苔玉のお喜世。続いて「石橋」。錦之助、鷹之資(13～22日休演)、左近の獅子の精。

2部の序幕が長唄舞踊「春調娘七種」。梅枝の曾我十郎、千之助の静御前、萬太郎の曾我五郎。続いて「義経千本桜 渡海屋 大物浦」。「一世一代」と銘打った仁左衛門の渡海屋銀平実は平知盛。前半はさっそうとした船宿主人ぶり、後半は源氏への強い憎しみから全てを達観した境地に至るまでの変化が鮮やかであった。孝太郎の典侍の局、時蔵の義経。

3部の序幕は舞踊「鬼次拍子舞」。芝翫の山樵実は長田太郎、雀右衛門の白拍子実は松の前。芝翫が1～9日休演し、彦三郎が1～3日、坂東亀蔵が4～9日を代演。続いて「鼠小僧次郎吉(鼠小紋春着雛形)」。菊之助の稲葉幸蔵、歌六の与惣兵衛、雀右衛門の松山。

3月は「三月大歌舞伎」。3部制で1部が「新・三国志 関羽篇」(横内謙介脚本・演出、市川猿之助演出、市川猿翁スーパーバイザー)。スーパー歌舞伎として作られた作品を猿之助の関羽を中心に再構築。笑也の劉備、中車の張飛。スピーディーな転換で飽きさせない構成となった。弘太郎が孔明で幹部昇進し、青虎と改名。

2部の序幕が「河内山」で「質見世」「玄関先」。仁左衛門の河内山、鴈治郎の松江出雲守、千之助の浪路。仁左衛門がしたたかさと豪快さを出した。仁左衛門は9～15日を休演し、歌六が河内山を代役。続いて「芝浜草財布」。菊五郎の政五郎、時蔵のおたつの息が合った。

3部の序幕が「輝虎配膳」。芝翫の輝虎が猛将の大きさ、魁春の越路が気丈さ、雀右衛門のお勝が優しみを出した。続いて「石川五右衛門」。幸四郎の五右衛門が公家、盗賊と場面ごとに変化を見せ、錦之助の久吉が端正さを示した。

4月が「四月大歌舞伎」。3部制で1部が「天一坊大岡政談」の通し。猿之助の天一坊、愛之助の山内伊賀亮、松緑の大岡越前。伊賀亮と越前の網代問答では愛之助のせりふが冴えた。

2部の序幕が「荒川の佐吉」。幸四郎の佐吉が人間としての成長を描き出した。尾上右近の辰五郎、梅玉の成川郷右衛門、白鸚の相模屋政五郎。続いて「時鳥花有里」。義経主従の吉野落ちの経緯を舞踊仕立てにした。梅玉の義経、又五郎の傀儡師輝吉実は龍田の明神。

3部の序幕が「ぢいさんばあさん」。仁左衛門の伊織、玉三郎のるん。続いて「お祭り」。玉三郎の芸者、中村福之助、歌之助の若い者。

5月は「團菊祭五月大歌舞伎」。3年ぶりの「團菊祭」。3部制で1部の序幕が「金閣寺」。雀右衛門の雪姫が愛らしさの中に色気と強さ、松緑の大膳、愛之助の東吉も役にふさわしい風情を出した。続いて「あやめ浴衣」。魁春の芸者で若手花形が出演。

2部の序幕が「暫」。海老蔵の権五郎が豊かな声量と華やかな容姿を生かした。左團次の武衡。続いて「土蜘蛛」。菊之助の僧智壽実は土蜘蛛の精、菊五郎の頼光、丑之助の音若と音羽屋の三代が顔をそろえた。

3部の序幕が「市原野のだんまり」。梅玉の平井保昌、蒼玉の鬼童丸、隼人の袴垂保輔。続いて「弁天娘女白浪」。尾上右近が本公演では初めて弁天小僧に挑んで成果を上げた。巳之助の南郷、彦三郎の駄右衛門、隼人の忠信、米吉の赤星。

6月は「六月大歌舞伎」。3部制で1部の序幕は「車引」。松緑の松玉丸、巳之助の梅玉丸、壺太郎の桜丸、猿之助の時平。続いて「猪八戒」(岡鬼太郎作、猿翁補綴)。猿之助の猪八戒がいけにえの娘になりすまして猿弥の妖魔と対決する。久々の上演で猿之助がさまざまな所作を軽やかに見せた。

2部の序幕が「信康」(田中喜三作、齋藤雅文演出)。染五郎が徳川家康の嫡男、信康で歌舞伎座初主演。白鸚の家康、魁春の築山御前、蒼玉の徳姫。続いて常磐津舞踊「勢獅子」。梅玉、松緑の鳶頭、雀右衛門、扇雀の芸者。梅玉が17～19日休演。

3部は「ふるあめりかに袖はぬらさじ」(有吉佐和子作、齋藤雅文・坂東玉三郎演出)。玉三郎のお園、鴈治郎の岩亀楼主人、中村福之助の藤吉、河合雪之丞の龜遊。

7月は「七月大歌舞伎」。3部制で1部が「當世流小栗判官」の通し。猿之助の小栗判官と浪七、笑也の照手姫。18～29日公演中止。

2部の序幕が「夏祭浪花鑑」。海老蔵の団七が殺し場に迫力を見せ、雀右衛門のお辰が気風の良さを感じさせた。右團次の徳兵衛、児太郎のお梶、市蔵の義平次、左團次の三婦。続いて「雪月花三景 仲国」。海老蔵の仲国、福助の八条女院、種之助の仲章、児太郎の小督局。19～29日公演中止。

3部は「風の谷のナウシカ 上の巻ー白き魔女の戦記」(宮崎駿原作、丹羽圭子、戸部和久脚

本、G2、尾上菊之助演出、尾上菊之丞演出・振付)。2019年の新橋演舞場で初演された作品の前半部分をベースに台本を改訂し、皇女クシヤナに焦点をあてた。菊之助のクシヤナ、米吉のナウシカ。菊之助が立役の強さを効果的に要所で出した。米吉がナウシカの一途さを表現。19～29日公演中止。

8月は「八月納涼歌舞伎」。この月からコロナ禍から始まった同劇場の客席制限が緩和され、花道の両脇を除く客席での観劇が可能となった。

3部制で1部の序幕が新作歌舞伎「新選組」(手塚治虫原作、日下部太郎脚本)。手塚漫画の初の歌舞伎化。二次元的な装置や手塚作品におなじみのキャラクターの登場など、漫画に寄った軽やかな作り。歌之助が父の敵討ちを誓う新選組の青年隊士、深草丘十郎で主演し、中村福之助が友人の鎌切大作を助めた。勘九郎の近藤勇、彌十郎の芹沢鴨。続いて舞踊「闇梅百物語」。勘九郎の骸骨、七之助の雪女郎若手花形が揃った。15～17日公演中止。19～25日は歌之助、福之助休演。大作を勘九郎、丘十郎を七之助が代役。

2部の序幕が「安政奇聞佃夜嵐」(古河新水原作、巖谷慎一脚色、今井豊茂補綴・演出)。幸四郎の青木貞次郎、勘九郎の神谷玄蔵。2人が佃島の人足寄場から脱走し、甲州で捕縛されるまでを描いた。幸四郎と勘九郎が好対照。続いて舞踊「浮世風呂」。猿之助の政吉、團子のなめくじ。20、21日は幸四郎休演で、猿之助が貞次郎を代役。團子が20～28日休演でなめくじを笑野が代役。19日公演中止。

3部が「弥次喜多流離譚」(杉原邦生構成、戸部和久脚本、猿之助脚本・演出)。幸四郎の弥次郎兵衛、猿之助の喜多八。19日公演中止。幸四郎休演で20、21日は青虎の弥次郎兵衛。

9月は「秀山祭九月大歌舞伎 二世中村吉右衛門一周忌追善」。2021年11月28日に没した吉右衛門の一周忌追善興行でゆかりの演目が並んだ。3部制で1部の序幕が「白鷺城異聞」(中山幹雄作、松貫四構成・演出)。松貫四は吉右衛門の筆名。歌六の宮本武蔵、又五郎の本多忠刻。続いて「寺子屋」。松丸丸、源蔵は幸四郎と松緑の日替わりで実力を発揮。魁春の千代、児太郎の戸浪、種之助の玄蕃、又五郎の淀くり。歌昇の長男、種太郎が菅秀才、次男、秀乃介が小太郎

で初舞台。

2部の序幕が「松浦の太鼓」。白鷺が初役で松浦鎮信、梅玉の大高源吾、歌六の宝井其角、米吉のお縫。続いて「揚羽蝶繡姿」(戸部和久構成)。「籠釣瓶」「鈴ヶ森」「熊谷陣屋」「播磨湯だんまり」「須磨の浦」をオムニバス形式で見せた。

3部の序幕が「仮名手本忠臣蔵 祇園一力茶屋」。仁左衛門の由良之助、雀右衛門のおかる、海老蔵の平右衛門。続いて「昇龍哀別瀬戸内藤戸」(松貫四構成、川崎哲男脚本)。能「藤戸」の歌舞伎化。菊之助の藤波と藤戸の悪龍、又五郎の佐々木盛綱。菊之助が藤波で子を思う母の情を描き、悪龍では迫力を出した。

10月は「芸術祭十月大歌舞伎」。3部制で1部の序幕が「鬼揃紅葉狩」(萩原雪夫作、市川猿翁演出)。猿之助の更科の前実は戸隠山の鬼女、幸四郎の平維茂。猿之助が姫姿で鬼女の本性をたくみに見せた。続いて新作歌舞伎「荒川十太夫」(神田松鯉口演より、竹柴潤一脚本、西森英行演出)。講談が原作の赤穂義士外伝物でまとまった作品に仕上がった。松緑の十太夫、猿之助の堀部安兵衛、坂東亀蔵の松平定直。

2部の序幕が「祇園恋づくし」(小幡欣治作、大場正昭演出)。古典落語を題材にした新作で1997年初演。鴈治郎が大津屋次郎八と女房おつぎ、幸四郎が留五郎と芸妓染香。2人が男女2役を演じ分け、軽妙な喜劇に仕上がった。続いて「釣女」。松緑の太郎冠者、幸四郎の醜女の息が合った。歌昇の大名、笑也の上臈。

3部の序幕が「源氏物語 夕顔の巻」(萩原雪夫作)。梅玉の光源氏、孝太郎の夕顔、魁春の六條御息所。続いて「盲長屋梅加賀鳶」。芝翫の道玄、雀右衛門のお兼、梅玉の松蔵。「お茶の水土手際」から「赤門捕物」まで。勢ぞろいはなし。芝翫は殺して凄み、お兼とのやりとりでテンポ感を出し、捕り手との立ち回りはユーモラスに見せた。

国立劇場の1月は菊五郎劇団主体で「南総里見八犬伝」の通し。尾上菊五郎監修、国立劇場文芸研究会補綴。菊五郎の犬山道節、松緑の犬飼現八と網干左母二郎、菊之助の犬塚信乃、時蔵の犬坂毛野。四季の風景を織り込んだメリハリの利いた公演。

3月は「近江源氏先陣館一盛綱陣屋一」。菊之助が初役の盛綱で心情の変化を細やかに見せ

た。又五郎の和田兵衛、片岡亀蔵の時政。

6月は「歌舞伎鑑賞教室」で「彦山権現替助剣」。杉坂墓所」「六助住家」で、又五郎の六助、孝太郎のお園。解説は玉太郎。

7月は「歌舞伎鑑賞教室」で「紅葉狩」。梅枝の更科実寅は戸隠山の鬼女、松緑の維茂。解説は萬太郎。

10月は「義経千本桜」の通し。国立劇場は老朽化による建て替えのため、2023年10月いっぱい閉場となることが発表された。10月からは「初代国立劇場さよなら公演」の副題が付き、この公演が歌舞伎での最初を飾った。

今回と同じ、菊之助の知盛、権太、忠信の3役で2020年3月に予定されていたがコロナ禍で中止になっていた。二段目から四段目までを3つのプログラムに分けての上演。Aプロが「鳥居前」「渡海屋」「大物浦」。Bプロが「椎の木」「小金吾討死」「鮎屋」。Cプロが「道行初音旅」「河運法眼館」。菊之助は3役すべてに成果をあげた。

11月は「歌舞伎&落語 コラボ忠臣蔵」。最初に春風亭小朝の浅野内匠頭による吉良上野介への刃傷を題材にした新作落語「殿中でござる」と古典落語「中村仲蔵」の口演。続いて「忠臣蔵五、六段目」。芝翫の勘平、笑也のおかる、歌六の定九郎と原郷右衛門、歌昇の千崎弥五郎、萬次郎のお才、梅花のおかや、松江の源六。芝翫が追い詰められていく感情をうまく表現した。

新橋演舞場の1月は新作歌舞伎「プベル〜天目の護美人間〜」(西野亮廣原作・脚本、藤間勘十郎演出・振付)。絵本「えんとつ町のプベル」が原作。海老蔵のプベル、熊八、田沼。19、20日公演中止。

8月が「超歌舞伎2022」。「萬代春歌舞伎踊」(松岡亮作)獅童の真柴秀康、初音ミクの出雲のお国。「永遠花誉功」(松岡亮脚本、藤間勘十郎演出・振付)。獅童の金輪五郎、初音ミクの芋環姫、小川陽喜の金輪小五郎、國矢の蘇我入鹿、蝶紫の定高。「超歌舞伎」の南座以外では初の劇場公演となった。

大阪松竹座は1月が「坂東玉三郎特別舞踊公演」。「口上」「藤娘」「お祭り」。

7月が「七月大歌舞伎」。昼夜2部制で、昼の序幕が「囃山姥」。孝太郎の八重桐、忝太郎の白菊、幸四郎の煙草屋源七実は坂田藏人。続いて「浮かれ心中」(井上ひさし作「手鎖心中」より。小幡欣

治脚本・演出、大場正昭演出)。勘九郎の栄次郎、七之助のおすず、三浦屋帚木、幸四郎の太助、鴈治郎の伊勢屋太右衛門、扇雀の番頭吾平。

夜が「堀川波の鼓」。仁左衛門の彦九郎、扇雀のお種、孝太郎のおゆら、勘九郎の源右衛門、亀鶴の床右衛門。続いて「祇園恋づくし」。鴈治郎の大津屋次郎八、おつぎ、勘九郎の太兵衛、幸四郎の留五郎、芸妓染香。

9月は「歌舞伎特別公演」。3部構成で1部が「傾城反魂香」。鴈治郎の又平、猿之助のおとく、愛之助の雅楽之助。「男女道成寺」愛之助の白拍子桜子実は狂言師左近、忝太郎の白拍子花子。

2部が「神靈矢口渡」。忝太郎のお舟、鴈治郎の頓兵衛、亀鶴の六蔵、鴈乃助の新田義峯、段之のうてな。「博奕十王」。猿之助の博奕打、青虎の閻魔大王。

3部は「夏祭浪花鑑」。愛之助の団七九郎兵衛、お辰、忝太郎のお棍、青虎の一寸徳兵衛、鴈治郎の三婦、千壽の磯之丞、りき彌の琴浦。

10月は「日本怪談歌舞伎 時超輪廻古井処」(G2脚本・構成、今井豊茂補綴・演出)。愛之助の浅山鉄山、細川巴之介、今井翼の室戸光、忝太郎のお菊、お春の方、蒼玉の船瀬三平、高松煌平、男女蔵の山名宗全。

南座は3月が「三月花形歌舞伎」。午前、午後2部制で配役を変えての同一演目。序幕が「番町皿屋敷」。青山播磨は隼人(午前)、橋之助(午後)、お菊は忝太郎(午前)、米吉(午後)。続いて「芋掘長者」。芋掘藤五郎は巳之助(午前午後とも)、治六郎は橋之助(午前)、隼人(午後)、緑御前は米吉(午前)、忝太郎(午後)。

5月が「歌舞伎鑑賞教室」。「吉野山」。吉太郎の佐藤忠信実は源九郎狐、千壽の静御前。

7月が「坂東玉三郎特別舞踊公演」。「口上」「高尾」「藤娘」。

8月が「坂東玉三郎特別公演」。「東海道四谷怪談」。玉三郎のお岩、愛之助の伊右衛門、喜多村緑郎の小仏小平、河合雪之丞の後家お弓。「元禄花見踊」。玉三郎、雪之丞、吉弥の元禄の女、緑郎、愛之助の元禄の男。

9月が「超歌舞伎2022」。

11、12月が「吉例顔見世興行」。3部制で1部の序幕が「すし屋」。獅童の権太、隼人の弥助、鴈治郎の梶原。続いて「龍虎」。扇雀の龍、虎之介の虎。2部の序幕が「封印切」。鴈治郎の忠兵

衛、扇雀の梅川、愛之助の八右衛門、東蔵のおえん、片岡亀蔵の治右衛門。続いて「松浦の太鼓」。仁左衛門の松浦鎮信、獅童の大高源吾、歌六の宝井其角、千之助のお縫。3部の序幕が「年増」。時蔵のお柳。続いて「女殺油地獄」。愛之助の与兵衛、孝太郎のお吉。

巡業は6、7月が「松竹歌舞伎舞踊公演」。A Bプロで配役が異なる。最初が「操り三番叟」。三番叟は橋之助(A)、中村福之助(B)、後見が福之助(A)、橋之助(B)。続く「連獅子」は芝翫の狂言師右近後に親獅子の精、歌之助の狂言師左近後に仔獅子の精。7月20～25日公演中止。

11月が「松竹特別巡業」。「中村獅童のHOWTO かぶき」「絵本『あらしのよるに』一人語り」。

御園座は4月が「陽春花形歌舞伎」。昼夜同一狂言。「相生獅子」。梅枝、蒼玉の姫。「雪」。菊之助の女。「解説」萬太郎。「身替座禪」。菊之助の右京、彦三郎の玉の井、萬太郎の太郎冠者。

5月が「坂東玉三郎特別舞踊公演」。「口上」。「隅田川」。玉三郎の斑女の前、鴈治郎の舟長。「傾城」。玉三郎の傾城。

8月が「超歌舞伎2022」。

10月が「坂東玉三郎特別公演」。「口上」。「十種香」。玉三郎の八重垣姫、橋之助の勝頼、雪之丞の濡衣、緑郎の謙信。「狐火」。玉三郎の八重垣姫。

博多座は6月が「六月博多座大歌舞伎」。昼夜2部制で、昼が「橋弁慶」。彦三郎の弁慶、萬太郎の牛若丸。「鷺娘」。菊之助。「すし屋」。菊五郎の権太、時蔵の弥助、梅枝のお里、芝翫の梶原。夜が「魚屋宗五郎」。菊之助の宗五郎、梅枝のおはま、彦三郎の磯部主計之助。「関の扉」。芝翫の関兵衛、時蔵の傾城墨染、梅枝の小町姫、萬太郎の宗貞。

8月が「超歌舞伎2022」。

平成中村座は10月が「十月大歌舞伎」。2部構成で1部が「角力場」。勘九郎の長五郎、虎之介の長吉、七之助の吾妻、新悟の与五郎。「幡隨長兵衛」。獅童の長兵衛、勘九郎の水野、七之助のお時、扇雀の唐犬。2部が「綾の鼓」。扇雀の秋篠、鶴松の華姫、虎之介の三郎次。続く「唐茄子屋」(宮藤官九郎作・演出)は落語の「唐茄子屋政談」と「不思議の国のアリス」の世界をないまぜにした新作歌舞伎。勘九郎の若旦那徳三郎、七之助の傾城桜坂、お仲、扇雀の八百八女房よし、吉原田んぼの蛙ゲコミ、弥十郎の大家源

六、荒川良々の達磨町の八百八、吉原田んぼのあめんぼ。

11月が「十一月大歌舞伎」。2部構成で1部が「寿曾我対面」。橋之助の祐経、中村福之助の五郎、歌之助の十郎、新悟の虎、鶴松の少将、勘九郎の鬼王。「舞妓の花宴」。七之助。「魚屋宗五郎」。勘九郎の宗五郎、扇雀のおはま、新悟のおなぎ、橋之助の主計之助、片岡亀蔵の太兵衛。2部が「唐茄子屋」。「乗合船」。

シアターコクーンでは2月に「渋谷・コクーン歌舞伎」。「天地坊」(河竹黙阿弥原作「五十三次天地坊」。宮藤官九郎脚本、串田和美演出)。2012年以来の再演。勘九郎の法策後に天地坊、七之助の人丸お六、獅童の地雷太郎、扇雀の久助。25、26日公演中止。

5月が「坂東玉三郎京丹後特別舞踊公演」。「老松」。「羽衣」。

9月が「市川猿之助春秋座特別舞踊公演」。「独楽」。團子。「口上」。「戻駕」。猿之助の与四郎、青虎の次郎作、壱太郎のたより。

勉強会も行われるようになった。7月に鷹之資の「翔之會」。「供奴」。鷹之資。「船弁慶」。鷹之資の静御前、平知盛の霊、松緑の弁慶、猿之助の舟長、門之助、猿弥の舟子、左近の義経。8月に梅玉一門勉強会「高砂会」。「越後獅子」。梅寿。「一人景清」。梅秋。「将門」。梅蔵の光圀、梅乃の滝夜叉姫。同月尾上右近自主公演「第六回研の會」。「かさね」。かさねと与右衛門を右近と吉田蓑紫郎が遣う人形が交互に勤めた。「実盛物語」。右近の実盛、彦三郎の瀬尾、壱太郎の小万、市蔵の九郎助、梅花の小よし。同月「第七回あべの歌舞伎 晴の會」。近鉄アート館。「伊勢参宮神乃賑」。松十郎、翫雀、當吉郎ら。同月に国立小劇場で「第28回稚魚の會・歌舞伎会合同公演」。「双蝶々曲輪日記 角力場、引窓」「俄獅子」。

白鷺が文化勲章、鳥羽屋里長が文化功労者、梅玉が人間国宝に選ばれた。

澤村田之助、坂東竹三郎が没した。また「演芸画報」の流れをくむ歌舞伎専門誌「演劇界」が4月号で休刊となった。

こだま・しょうこ

演劇評論・ライター。著書に「芝翫芸模様」(集英社)、「二代目 聞き書き中村吉右衛門」(朝日文庫)、「完本 中村吉右衛門」(朝日新聞出版)。聞き書きに「84 八代目中村芝翫」(光文社)など。

## [商業演劇]

## 2022年の商業演劇

## 水落 潔

2月24日にロシアが隣国ウクライナに侵攻し世界中に衝撃が走った。戦争は長期化し終結の見通しは立っていない。中国と米国の関係もさらに悪化した。7月には参院選の応援をしていた安倍晋三元首相が銃撃され死亡した。容疑者は「母親が世界平和統一家庭連合(旧統一教会)の信者で家庭が崩壊し、教会と親密な関係の安倍氏を狙った」と供述、自民党の多くの議員が教会と繋がりがあったことが発覚し大問題になった。岸田内閣が安倍氏を国葬にしたことにも批判が高まった。昨年五輪を巡る汚職疑惑が浮上した。円安で物価が急上昇した。岸田内閣の4閣僚が辞任に追い込まれ、一方では防衛費の大幅増加が決定した。コロナ禍は3年目をむかえても依然として収束せず、1月に感染6波、8月に7波、12月に8波を迎え感染者数は12月末で2878万人を超えた。ただしワクチン接種率も高まり秋から徐々に規制が緩和された。

劇場はコロナ感染を避けるため苦労した。夏までは多くの劇場が観客数を減らして公演した。その後もすべての劇場が観客にマスクの着用を求め、飲食や会話を禁止している。その努力で大劇場でのクラスター発生は無かったが、スタッフやキャストに感染者が出て公演が延期や中止になったケースは頻発した。観て食べて喋ってという総合レジャーの性格を持つ商業演劇界は今年も苦境を強いられた。若い観客が多いミュージカルを除くと観客数は依然として低迷したままである。

新橋演舞場は今年も前半は客席数を減らして公演した。1月が海老蔵らの新作歌舞伎「プペル」。2月の前半は齋藤雅文作・演出「有頂天作家」で渡辺えりとキムラ緑子が主演した。1992年に「恋ぶみ屋一葉」の題で杉村春子と乙羽信子で初演し、94年の再演の舞台が読売演劇大賞最優秀賞を受賞した作品である。明治末、花街の女たちの手紙の代筆をしている奈津と、人気作家になった涼月、さらに死んだと思っていた親友の元芸者小菊、その三人を巡る人情噺が展

開する。渡辺徹、大和田美帆、影山拓也らが共演した。公演の前半はコロナ禍で休演した。舞台は一通りの出来に終わった。2月末から3月前半は夢枕獏原作、マキノノゾミ脚本、鈴木裕美演出「陰陽師」。陰陽師安倍清明と親友の源博雅を中心に展開する怪異譚で三宅健と林翔太が演じた。陰陽師のライバルの蘆屋道満に操られ鬼になりかけていた姫を二人が協力して助けようとする物語で、脚本演出が上手く面白い舞台に仕上がった。林が好演し音月桂、木場勝己らが共演した。3月中ばはジョセフ・ケッセリング作、錦織一清演出の「毒薬と老嬢」で、1941年にブロードウェイで初演、世界中で上演を重ねてきた喜劇。第二次世界大戦時のニューヨークの住宅街が舞台。慈善家を自称する老姉妹は「部屋を貸します」の貼り紙を出し、訪ねてきた身寄りのない老人に「おいしい酒」を飲ませて安楽死させてきた。ところが狂暴な殺人犯が押し入ってきて事態が混乱していくブラックコメディ。久本雅美と藤原紀香が姉妹を演じ渋谷天笑、納谷健、丹羽貞仁らが共演した。演出は台詞を大阪弁にして笑いを盛り上げた。3月後半はOSKの「春のおどり」。

4、5月は恒例の「滝沢歌舞伎 ZERO」で滝沢秀明が演出し、Snow Manが出演した。ジャニーズ事務所が得意な絢爛としたショーで満員の観客を集めたが、4月25日に緊急事態宣言が出て以後の公演は中止になった。6月はシリーズ第8弾の「熱海五郎一座」で、吉高寿男作、三宅裕司構成・演出「任侠サーカス〜ギズナたちの挽歌〜」を上演した。三宅のほか渡辺正行、ラサール石井、小倉久寛、春風亭昇太らお馴染みのメンバーに、ゲストとして浅野ゆう子とジャニーズ事務所の塚田僚一が加わった。暴対法や組員の高齢化で廃業寸前になった「任侠熱海組」は、親分の息子でサーカス団の猛獣使いをしている木下に跡目を継がせた。木下はその才能をヤクザ稼業で爆発させるが、それが敵対する女組長を刺激しマル暴の刑事たちも巻込んだ大騒動に

なる。7月は「藤山寛美三十三回忌追善喜劇特別公演」。娘の藤山直美と松竹新喜劇が出演して故人の当たり役を上演した。最初が新喜劇の座員たちによる茂林寺文福作「愛の設計図」で渋谷天外、高田次郎、故人の孫の藤山扇治郎らが出演した。次いで「藤山寛美偲面影」と題して故人の舞台映像を上映し、最後が鍋井克之著、館直志脚色「大阪ざらい物語」。寛美が演じた気は優しいが風変わりな息子を娘に直して直美が演じ、林与一、大津嶺子、西川忠志らが共演した。一部コロナで休演したが、腕のある役者が揃ったので、二作とも水準を超える好舞台になった。8月前半はオリジナルミュージカル「流星の音色」。

後半から9月初めは「超歌舞伎2022」。半ばから10月前半はジャニーズ事務所のミュージカル「少年たち」。後半は20年に初演した「女の一生」の再演。森本薫が杉村春子のために書いた作品で文学座の財産演目として上演を重ねてきたが、20年に段田安則演出で大竹しのぶが主演して好評を得た。その時共演した段田、風間杜夫、銀粉蝶、高橋克実らが再び集結し水準を超えた舞台に仕上がった。11月から12月前半は劇団☆新感線の「薔薇とサムライ2 海賊女王の帰還」。中島かずき作、いのうえひでのり演出の痛快娯楽劇で、海賊女王を天海祐希、石川五右衛門を古田新太が演じ、二人が手を携えて海上制覇を狙う悪の一味に立ち向かう物語。高田聖子、生瀬勝久、早乙女友貴らが共演。ロックが響く中、変化に富んだコミカルなストーリーが派手なアクションで展開するこの劇団らしい賑やかな舞台であった。後半は「舟木一夫ロングコンサート」。

松竹はほかに3月にサンシャイン劇場で藤井清美作、演出「行先不明」を上演した。旅行代理店を舞台に運が悪いと言われている男がひよんなことから再起する姿をユーモラスに描いた話で、佐藤アツヒロが主演し真琴つばぎ、五関晃一らが共演した。4月には日生劇場でミュージカル「ジョセフ・アンド・アメージングテクニカラー・ドリーム・コート」、9月にはシェイクスピア作「夏の夜の夢」を井上尊晶演出で上演した。舞台を日本の神社の森に置き換え、中村芝翫、南果歩、生駒里奈、高地優吾らが共演した。

帝劇は3月以外は年間ミュージカル路線を貫

いた。ミュージカルのラインナップは1月が「ジャニーズ・アイランド」、2月が「笑う男」、4、5月が恒例の「エンドレス・ショック」、6月が「ガイズ&ドールズ」、7、8月が「ミス・サイゴン」、9月が「DREAM BOYS」、10、11月が「エリザベート」、12月が「ジャニーズ伝説2022」だったが、コロナ禍で一時休演することも多かった。

3月は宮崎俊監督のアニメ映画を舞台化した「千と千尋の神隠し」を上演した。翻案・演出はジョン・ケアードで、能舞台をイメージし木の質感を生かした美術(ジョン・ボウサー)、人力で動かすパペット(トビー・オリエ)動と静を組み合わせた振付(井手茂太)が巧みで幻想的で妖しい異界を表現、その中で訓練に耐え成長していく千尋の物語を展開した。千尋は橋本環奈と上白石萌音のダブルキャストで夏木マリ、咲妃みゆ、妃海風、橋本さとし、菅原小春、醍醐虎汰朗ら多彩なジャンルの俳優が共演した。今年屈指の優れた舞台に仕上がった。

シアタークリエはミュージカルが主流だったが、昨年同様にストレートプレイの公演が増えた。1月がミュージカル「リトルプリンス」。2月前半はシリーズになったKERA-CROSS第4弾で、ケラリーノ・サンドロヴィッチ作「SLAP STICKS」を三浦直之演出で上演した。物語は1939年、中年男のピリーが伝説のコメディアンのアバククル主演のサイレント映画をリバイバル上映するため奔走する場面から始まる。ピリーは若い時にアバククルに憧れ、その後サイレント映画の助監督になった。舞台は彼の青春時代、助監督時代、今とを行き来しながら、サイレント映画を愛し、その時代を生きた人々の姿を描いていく。木村達成が若い時代の、小西遼生が中年のジミーを演じ、桜井玲香、壮一帆、金田哲らが共演した。2月後半から3月の半ばはパム・ジュムス作、栗山民也演出、大竹しのぶ主演の「ピアフ」。極貧の暮らしから世界的なスターに押し上ったシャンソン歌手エディット・ピアフの人生を歌と芝居で綴った舞台で、再演を重ね大竹の代表作になった。3月末から4月中ばはミュージカル「ネクスト・トゥ・ノーマル」、後半はプレミアム音楽朗読劇「VOICARION XIV ~ スプーンの前」。5月はヒッチコック監督の映画「三十九階段」をウォーリー木下が上演台本・演出した「ザ・サーティナイン



ン・ステップス」だったが、開幕2日目に主役の平方元基が体調を壊し公演中止になった。6月はミュージカル「CROSS ROAD」、7月は「ふぉ〜ゆ〜」のミュージカル、8月は音楽劇「スラムドッグ\$ミリオネア」で同名の小説から瀬戸山美咲が上演台本、演出した。インドのスラム街に生まれたラムが人気クイズ番組に出演して難問を次々にクリアしていく物語。何故彼が難問を解けたのかという謎が、彼の波乱の人生と重ね合わせて展開していく。屋良朝幸が主演し川平慈英、大塚千弘、村井良大、唯月ふうからが共演しエネルギーな舞台を創り上げた。後半は「ダディ・ロング・レッグズ」の再演。9月は「モダン・ミリー」とミュージカルが続いた。10月は三田紀房の劇画から劇団チョコレートケーキの古川健脚本、日澤雄介演出の「アルキメデスの大戦」。1933年軍拡路線を歩む日本海軍で巨大戦艦建造派の嶋田少将と航空母艦建造派の山本五十六少将が対立する。戦艦建造費に疑問を持った山本は、天才数学者の権にその謎を解くよう依頼した。戦争を止めたいという山本の熱意にほだされた権は海軍という巨大な権力と戦うことになるが…という物語。鈴木拡樹、宮崎秋人、岡田浩暉、神保悟志らが出演した。第二次大戦を素材に数々の秀作を作ってきた古川・日澤コンビだが、この作品は平凡な出来に終わった。10月後半からはミュージカル「ファンタスティックス」、11月はショー「バルバル・ランデヴー」、12月はエイミー・ハーツォグ作、上村聡史演出「4000マイルズ〜旅立ちの時〜」を上演した。アメリカの西のシアトルから4000マイルを自転車走ってきた青年レオがニューヨークに住む91歳の祖母ヴェラを訪ねてくるところから始まる物語。空間的な大旅行をしたレオと時間的な大旅行をしてきたヴェラが互いの価値観や体験の差を超えて信頼しあうまでを綴った戯曲で、岡本圭人と高畑淳子が演じ心温まる好舞台になった。

東宝はほかに2月に日生劇場で「ラ・マンチャの男」、3月に「ラ・カージュ・オ・フォール」、5月に「四月は君の嘘」、10月に「ジャージー・ボーイズ」、9、10月にBrillia HALLで「ヘアスプレー」、11、12月にシアターオーブで「天使にラブ・ソングを」と数々のミュージカルを上演したが、コロナ禍で一時期中止する公演も多かつ

た。

明治座は自主公演が減り貸館やテレビ局、大手プロダクションとの提携公演が増えた。1月は「梅沢富美男劇団」で泉ピン子が特別出演した。1月末から2月前半はフジテレビとの共催で「サザエさん」。前作よりさらに後の物語で、それぞれ大人になったサザエさん一家の悩みを描いた舞台。田村孝裕脚本・演出で藤原紀香のサザエさん。葛山信吾、松平健、高橋恵子らが共演したが舞台の出来は平凡だった。2月後半から3月前半は「藤山直美 前川清公演」で横山一真脚本、竹園元演出の「恋の法善寺横丁」と「前川清オンステージ」の二本立て。「恋の法善寺横丁」は小料理屋の女将と先代の主人に恩義を受けた板前が手を携えて店を守る内に恋仲になる人情物語だった。3月後半から4月は末満健一脚本・演出「刀剣乱舞」。後半から5月初めは「香取慎吾 二〇二二年特別公演」。その後「五木ひろし劇場」、「吉本新喜劇」を上演した。6月は「氷川きよし公演」、7月は「吉幾三公演」。8月は「ゲゲゲの鬼太郎」だったが、コロナ禍のため途中で公演を打ち切った。7月末から8月半ばはミュージカル「三都物語」。9、10月は「坂本冬美公演」で中村雅俊が参加、その後「羽生保スウィングボーイズ」を上演した。11月は「三銃士企画」の第2弾の倉持裕作・演出の「歌妖曲 中川大志之丞変化」。三銃士とは明治座、東宝、ヴィレッジの3人のプロデューサーがタッグを組んで製作する公演で、今回は昭和30年代の歌謡界を舞台にしたバックステージ物。彗星の様に現れた人気歌手の謎の経歴を探るというサスペンス仕立ての物語で、実は彼は歌謡界を支配する一家に生まれたが醜い身体を持っていたため一家から見捨てられてきた。ところが名医の手で奇跡的に美しい身体になり、スター街道を申し上がる。そして自分を見捨てた一族に次々と復讐していくという物語で、シェイクスピアの「リチャード三世」が下敷きになっている。中川大志が醜い男とスター歌手を演じ分けるのが趣向で、当時を思わせる歌謡曲をふんだんに使った娯楽劇であった。松井玲奈、浅利陽介、池田成志、山内圭哉、中村中らが共演。12月は「三山ひろし」「北島三郎」「どうなる家康」ほか短期公演を並べた。

前進座は1月前半に浅草公会堂と京都劇場で

山田洋次・朱海青脚本、小野文隆演出「一万石の恋」を上演、1月後半と10、11月に全国巡演した。2月から6月までは「松本清張朗読劇シリーズ」「くずい 屑屋でござい」「ひとごろし」「棒しばり」で全国巡演。5月の国立劇場公演は鶴屋南北作「杜若艶色紫」を国太郎、矢之輔、芳三郎らで41年ぶりに上演した。7、8月は「東海道四谷怪談」を各地で巡演した後、国立文楽劇場で上演。9月は国立小劇場ほかで山本周五郎原作「雨あがる」を上演した。11、12月は小池章太郎作「牛若丸」を全国巡演した。

梅田芸術劇場が8月にサンシャイン劇場でロペール・トマ作、板垣恭一演出「8人の女たち」を上演した。雪に閉ざされた豪邸で主人が死んでいるとの報があった。屋敷には主人の家族やメイドなど8人の女が住んでいる。誰が犯人かという密室スリラーで、湖月わたる、真琴つばさ、水夏希などキャスト全員が宝塚歌劇の元スター。作が面白いうえ、宝塚スターを揃えた華やかな舞台になった。9月にドラマシティでも上演した。

TBSが開局70周年を記念してホリプロと共催で、7月に赤坂ACTシアターで「舞台 ハリーポッターと呪いの子」を開幕した。半年かけて劇場を専門劇場に改装したロングラン公演である。「ハリーポッター」シリーズの著者のJKローリングが脚本を担当した初の舞台版で16年にロンドンで開幕、ニューヨーク、ハンブルグなど世界各都市で上演、日本は7番目の上演になる。オリビエ賞9部門、トニー賞6部門を獲得した作品で、ハリー、ロン、ハーマイオニーらが魔法界を救ってから19年後の物語。ハリーポッターは今では三人の子を持つ中年男で魔法省で働いている。次男のアルバは英雄になった父親に反発し、父親たちの時代の事を調べるうち奇怪な事件に遭遇する。過去と現在が不気味に交錯するサスペンスで、数々のテクニクで見せる魔法をはじめ舞台美術、衣裳、演出の巧さで最上のエンターテインメントに仕上がった。ハリーは藤原竜也、石丸幹二、向井理がリレーで演じ、多彩なキャストが共演した。劇団☆新感線が4月に東京建物Brillia HALLで中島かずき作、いのうえひでのり演出「神州無頼街」を上演した。福士蒼汰、松雪泰子、高嶋政宏らに粟根まことら劇団員が共演した舞台で、変化に富ん

だ物語とアクションが見せ場の娯楽大作。

御園座は東京や大阪の舞台の引っ越し公演が多かった。1月が「中村美律子・純烈公演」ほか。2月は「宝塚星組」、3月は「行先不明」吉幾三公演「毒薬と老嬢」。4月は「花形歌舞伎」で、5月は「玉三郎コンサート」と「舞踊公演」のほか「北島三郎」「吉本の漫才サミット」、6月は「四月は君の嘘」「千と千尋の神隠し」、7月は「梅沢富美男劇団」と、山内恵介、「よしもと若手公演」など。8月は「吉本新喜劇」「流星の音色」、「超歌舞伎」など。9月は「水川きよし公演」「舟木一夫公演」。10月は「玉三郎特別公演」と「少年たち」。11月は「ヘアスプレー」と「よしもと爆笑公演」、12月は「エリザベート」だった。

松竹座は新橋演舞場と連携した公演が多かった。1月が「玉三郎特別公演」、2月はSKDレビュー「春の踊り」だったがコロナ禍のため途中で中止。3月は「関ジャニJr.」、4月前半は「東西ジャニーズJr. ぼくらのサバイバルウォーズ」と「毒薬と老嬢」。5月は藤山寛美三十三回忌追善公演で「愛の設計図」「偲面影」、「大阪ざらい物語」を上演した。藤山直美と松竹新喜劇のほか、林与一、桂米團治らが出演した。6月は「花形歌舞伎」、7月は恒例の「大歌舞伎」、8月は関ジャニの「サマー・スペシャル2022」、9月は短期間の「歌舞伎特別公演」の後、東野ひろゆき脚本、川浪ナミヲ・竹園元演出「アンタックチャブル・ビューティ」を上演した。南のシャッター商店街の探偵事務所を舞台にした推理劇で、三田村邦彦の探偵に紅ゆずるが七変化を見せる娯楽劇。10月は「新作歌舞伎」、11月は短期公演。12月は関西テレビと提携した「大阪環状線一天満駅編」を上演した。シリーズ第3作で天満の小料理屋一家を巡る15年間の物語。佐藤江梨子、月亭八光らが出演した。

新歌舞伎座は今年も歌手のコンサートが中心だったが、東京で上演した話題作を上演するケースも増えている。1月は前川清、藤山直美で「恋の法善寺横丁」とコンサートで田村亮、野村真美らが共演。2月は「市川由紀乃」や明治座からの引っ越し公演「サザエさん」など。3月は「稲垣潤一」「舟木一夫」「福田こうへい」のコンサートとミュージカル「カーテンズ」、4月は「神野美伽」「天童よしみ・コロケ」「北島三郎」らのコンサート、5月は「三山ひろし」「刀剣乱舞

など。6月は「吉幾三」「梅沢劇団・研ナオコ」、7月は「山内恵介」、「水川きよし」ら。8月は「香西かおり」「川中美幸」ら。9月はこまつ座の「頭痛肩こり樋口一葉」と「世良公則」「ゴダイゴ」「吉田兄弟」「島津亜矢」ら。10月はシアタークリエから引っ越した「モダン・ミリー」、ノダマップ製作の「Q」「五木ひろし」、11月はミュージカル「ジャージー・ボーイズ」「福田こうへい」、12月は「島津亜矢」、「プレミア朗読劇」「グレイス」と明治座から引っ越した「歌妖曲一中川大志之丞変化」というラインナップだった。

南座は1月前半が松竹新喜劇で「お種と仙太郎」、「お祭り提灯」を上演、後半は「有頂天作家」で新橋演舞場でも上演した。3月前半は「花形歌舞伎」。後半は演舞場から引っ越した「陰陽師」、4月は3年ぶりの「都をどり」。4、5、6月は「春の舞台体験ツアー」「歌舞伎鑑賞教室」、「舟木一夫」のコンサート、「初夏の舞台体験ツアー」。7月は「桂米朝一門会」「OSKレビュー陰陽師」「玉三郎舞踊公演」、8月は「玉三郎特別公演」、9月はミュージカル「流星の音色」、獅童の「超歌舞伎」、10月は「藤山寛美三十三回忌追善喜劇特別公演」で、松竹新喜劇の「えくぼ」、映像「藤山寛美 偲面影」、藤山直美主演の「はなのお六」を上演、10月末から11月は演舞場から引っ越した「女の一生」、壺太郎とジャニーズのタレントが共演した「波濤を超えて」12月は恒例の「顔見世」だった。

博多座は1月が「ガラスの動物園」、「スラップ・スティックス」「マイ・フェア・レディ」と東京の舞台の引っ越し、2月が「玉三郎の歌舞伎」、3月が「サザエさん」「笑う男」、4月が「ピアフ」「ラ・カージュ・オ・フォーレ」、5月が「千と千尋の神隠し」、6月が「歌舞伎」、7月が「四月は君の嘘」「ガイズ&ドールズ」、8月は「水川きよし」「超歌舞伎」、9月は「エンドレス・ショック」、10月は「ヘアスプレー」「ミス・サイゴン」、11月は「プレミア朗読劇」、12月は例年通りに市民に貸し出したほか文楽を上演した。

今年も多くの演劇人が亡くなった。劇作家の吉永仁郎(92歳、3月12日)、俳優の西郷輝彦(75歳、2月20日)、川津祐介(86歳、2月26日)、井上倫宏(63歳、2月28日)、宝田明(87歳、3月14日)、山本圭(81歳、3月31日)、竹内照夫(75歳、6月15日)、佐野浅夫(96歳、6月28日)、古谷一行

(78歳、8月23日)、渡辺徹(61歳、11月28日)、女優の野村昭子(95歳、7月1日)、久野綾希子(71歳、8月22日)、あき竹城(75歳、12月15日)、歌舞伎俳優の坂東竹三郎(87歳、6月17日)、澤村田之助(89歳、6月23日)、長唄の杵屋浄貢(84歳、1月19日)、常磐津節の常磐津英寿(95歳、12月15日)、演劇プロデューサーの綿貫凜(10月31日、58歳)の各氏である。謹んでご冥福を祈りたい。

#### みずおち・きよし

1936年大阪府生まれ。古典演劇評論家。桜美林大学名誉教授。早稲田大学文学部演劇科卒業。毎日新聞社学芸部を経て編集委員。1991年『上方歌舞伎』で芸術選奨新人賞受賞。

[現代演劇]

## 2022年の現代演劇

林 尚之

ロシアのウクライナ侵攻により、リアルタイムの映像で悲惨な戦争の状況を見る機会が多くなった。遠い出来事だった「戦争」がより現実のものとして意識させられた1年だった。演劇界でも、戦争と平和をテーマにした作品が例年以上に上演された。そして、沖縄が日本に返還されて50年という節目の年だったことから、いまだに基地が集中する沖縄の現状を問う作品も多かった。

3年ぶり再演となった野田秀樹作・演出のNODA・MAP公演「Q A Night At The Kabuki」は、ロミオとジュリエットをモチーフに戦争のため引き裂かれた2人(松たか子、上川隆也)の極限の愛の痛切さがさらに増幅した。ロンドン、台北でも上演され、大きな反響を呼んだ。

劇作家の古川健、演出家の日澤雄介が率いる劇団チョコレートケーキは「生き残った子孫たちへ 戦争六篇」と題して、戦争を巡る6作品を連続上演した。沖縄戦の末期、洞窟(ガマ)に逃れてきた人々の極限状況を描いた新作「ガマ」をはじめ、1945年8月の敗戦を境に状況が一変する朝鮮半島に残された日本人検事たちの姿を描く「追悼のアリラン」、中国と深く関わりながら、南京事件を止められなかった陸軍大将松井石根の悔恨の姿が痛切な「無畏」、開戦前に必敗を予見しながら暴走する軍部を止められなかったエリート官僚が戦後に回顧する「帰還不能点」、人間魚雷に命を捧げた男たちを描く短編「〇六〇〇猶二人生存ス」、米国で治療を受けた原爆乙女をモデルにした短編「その頬、熱線に焼かれて」を上演した。

古川は劇団以外でも戦争を巡る作品の脚本を手掛けた。劇団昂で新藤兼人監督の映画をもとにした「一枚のハガキ」(北村総一郎演出)、シアタークリエで漫画が原作の山崎貴監督の映画をもとにした「アルキメデスの大戦」(日澤演出)。「一枚のハガキ」は戦争末期に召集された中年兵士から妻へのハガキを託された戦友の物語で、「アルキメデスの大戦」は戦艦大和の建造の是非

を巡る天才数学者の壮絶な戦いを描いた。

沖縄をテーマにした舞台では、神奈川芸術劇場「ライカムで待っとく」は沖縄在住の若手劇作家兼島拓也に依頼し、田中麻衣子が演出した。基地を抱える不条理な状況下にある沖縄の人々と本土の人間との微妙な距離感を焙り出した。ホリプロの畑澤聖悟作、栗山民也演出、松山ケンイチ主演「hana—1970、コザが燃えた日」は、復帰直前に起きたコザ騒動を背景に血のつながらぬ家族の物語。名取事務所がACO沖縄と共同制作した内藤裕子作・演出「カタブイ、1972」は3世代の家族を通して復帰した1972年の沖縄を描いた。同作は鶴屋南北戯曲賞、ハヤカワ『悲劇喜劇』賞を受賞した。文化座の杉浦久幸作、鶴山仁演出「命どう宝」は復帰のために戦った人々をモデルにした作品。いずれも力作だった。

2020年から続くコロナ禍で、舞台関係者に感染者、体調不良者が出るたびに公演中止となるケースが相次いだ。三谷幸喜作・演出「ショウ・マスト・ゴー・オン」では11・12月の公演期間中に主演の鈴木京香をはじめ出演者4人が感染などで休演する緊急事態があった。その度に三谷が代役を務め、結果的に4人の代役を1人で担った。

年末に衝撃的な出来事があった。女優が所属劇団の主宰者である演出家をセクハラで告発し、損害賠償を求めて訴訟を起こした。訴えられた演出家は事実無根として反論し、法廷の場で争われている。宝塚歌劇団では男性演出家が演出助手へのセクハラで退団の処分を受けた。

2022年で最も注目された若手劇作家は劇団た組主宰の加藤拓也だろう。作・演出した「もはやしずか」は夫婦(橋本淳、黒木華)の問題をベースに家族や自身の存在意義を問う作品。

iakuの横山拓也は、俳優座に「猫、獅子になる」を書き下ろした。中学時代のいさかいが原因で不登校となり、50歳になっても引きこもる美夜子(清水直子)を中心に8050問題を抱えた

家族を描いた。演出は横山と3度目のタッグとなる眞鍋卓嗣。新国立劇場初登場となった「夜明けの寄り鯨」は、捕鯨で栄えた和歌山県の港町を舞台に、25年前に傷つけたかもしれない男性の面影を追う女性(小島聖)の物語で、演出は大澤遊。「あつい胸騒ぎ」が再演され、母親役の枝元梢が紀伊国屋演劇賞を受賞した。

トラッシュマスターズの中津留章仁は、「出鱈目」で町興しのために始めた芸術祭で受賞した作品を巡る表現の自由に切り込んだ。ジェットラグプロデュースの「見舞う客」は事故で記憶を失った女性を見舞う加害者男性の謎をサスペンスタッチで描き、続く「Vanity」では大量生産された服の余剰在庫の途上国への寄付が抱える問題を浮き彫りにした。

モダンスイマーズの蓬萊竜太は、新作「だからピリーは東京で」と5年前に初演した作品をリニューアルした「広島ジャンゴ2022」を上演。「だからピリー」は何か始めようとする若者の物語。「広島」は広島の牡蠣工場で働くシングルマザー(天海祐希)と彼女に手を焼く工場のシフト担当(鈴木亮平)を主人公に社会と闘う女性の姿を西部劇シーンも挟んで描いた。

日本劇作家協会の会長に就任したミナモザの瀬戸山美咲は、演出とともに「ペーター・ストックマン」で翻案、音楽劇「スラムドッグ\$ミリオネア」で上演台本を手掛けた。

ケラリーノ・サンドロヴィッチが書き下ろした「世界は笑う」は、終戦から10年後の新宿を舞台に昭和の喜劇人の破天荒な生き様を描いた。KERA・MAP公演「しびれ雲」では独特の方言を話す架空の小さな島に現れた謎の男(井上芳雄)と島の人々との群像劇。

松尾スズキが芸術監督を務めるシアターコクーンで作・演出した「ツグマンの世界」は昭和初期から戦後を舞台に作家ツグマンを取り巻く人々の濃密な愛憎劇。

ラップ屋の鈴木聡が作・演出した「百日紅、午後四時」は、夫を事故で亡くした女性(市毛良枝)を巡る家族愛の物語。

JACROWの中村ノブアキの「鶏口牛後」は起業をテーマに2つの人生がパラレルワールドで展開。「キョウカイセン」はオーディションで選ばれた俳優たちと創り上げた。

Serial numberの詩森ろぼが作・演出した

「Secret War—ひみつせん」は戦時研究を行った登戸研究所の女性研究員(三浦透子)を中心に戦争が引き起こす残酷と無為を描いた。

鄭義信は、大鶴佐助が座長の劇団ヒトハダ旗揚げ公演で作・演出した「僕は歌う、青空とコーラと君のために」は、1950年の東京郊外のキャバレーを舞台に歌でつながる人たちの姿を描いた。

公共劇場では、新国立劇場は芸術監督の小川絵梨子が就任から4年目に入った。小川が演出したアニー・ベイカー作「アンチポデス」は閉ざされた部屋で物語を生み出す作業をする8人を通して言葉の在り方、他者との関係性を描いた。ケネス・ロナーガン作、桑原裕子演出「ロビー・ヒーロー」はロビーの警備員(中村蒼)が思わず口を滑らせたことから起こるトラブルから正義とは何かを問う。デュレンマット作、五戸真理枝演出「貴婦人の来訪」は大富豪の貴婦人(秋山菜津子)の復讐がかつての恋人を死に追いやる悲喜劇。開場25周年記念公演のトム・ストップード作、小川演出「レオポルトシュタット」は20世紀前半のオーストリアに生きたユダヤ人実業家(浜中文一)の一族を襲う悲劇の一大叙事詩。須貝英作、稲葉賀恵演出「私の一ヶ月」は、英国のロイヤルコート劇場との劇作家ワークショップから生まれた作品で、舞台上の3か所の場所で起こる出来事が時空を超えて交差する。

神奈川芸術劇場は、芸術監督の長塚圭史の上演台本・演出で西遊記をベースに神奈川県の伝説を巡る冒険譚「冒険者たち」、幼い息子を事故で亡くした夫婦(小島聖、田代万里生)の葛藤と再生を描くリンゼイ・アペアー作、小山ゆうな演出「ラビット・ホール」を上演した。

東京芸術劇場は、12世紀の英国を舞台にヘンリー2世ら王家の壮絶なバトルを描いたジェームズ・ゴールドマン作、森新太郎演出「冬のライオン」、金に執着する因業なアルバゴンを主人公にしたモリエールの傑作喜劇をルーマニアの演出家シルヴィウ・ブルカレーテが演出した「守銭奴 ザ・マネー・クレイジー」を上演。ともに佐々木蔵之介が主演した。

世田谷パブリックシアターでは、倉持裕作・演出「お勢、断行」を上演。江戸川乱歩の短編をもとに悪女お勢(倉科カナ)を描く。デヴィッド・アイヴズ作、五戸真理枝演出「毛皮のヴィー

ナス」はオーディションに来た女優(高岡早紀)と演出家(溝端淳平)の会話を通して人間の性的欲望を描く二人芝居。ルイジ・ルナーリ作、白井晃の上演台本・演出「住所まちがい」は自分の生存も不確かな極限状況で3人の男(仲村トオル、田中哲司、渡辺いっけい)が展開する奇妙な会話劇。松田正隆作、栗山民也演出「夏の砂の上」は職を失って妻も家を出た男(田中圭)の悲哀と心の乾きを描く。アラバール作、生田みゆき演出「建築家とアッシリア皇帝」は孤島から世界に挑む男2人(岡本健一、成河)の物語で、成河は紀伊国屋演劇賞を受賞した。

パルコ劇場では、カナダの作家ニコラス・ピヨン作、宮田慶子演出「エレファント・ソング」は診察室を舞台に患者の男(井之脇海)が仕掛ける心理スリラー。三谷幸喜作の5人の吸血鬼をめぐるホラーコメディ「VAMP SHOW」を河原雅彦演出で再演。幽霊と会話できる復員兵(神山智洋)を主人公にした安部公房作「幽霊はここにいる」を稲葉賀恵が演出した。

シアターコクーンでは、アーサー・ミラー作、リンゼイ・ポスナー演出「みんな我が子」は円満そうな家族(堤真一、伊藤蘭、森田剛)の再生と崩壊を描いた。野田秀樹作、杉原邦生演出、成田凌主演「パンドラの鐘」は戦争前夜の長崎の古代遺跡の発掘現場から古代王国がよみがえる野田ワールド全開の舞台。赤堀雅秋作・演出「パラダイス」は悪に手を染める男(丸山隆平)の栄枯盛衰を描く。

新劇系の劇団は観客の高齢化が進み、若い世代の取り込みに力を入れている。25歳以下のユース割引、中高校生の割引のほか、無料の試みも登場。劇団民藝では支援者の寄付金をもとに人数限定の「ルーキーシート」を設定。事前登録して無料観劇できるシステムで、ほかの劇団にも広がっている。

文学座は、創立者の獅子文六の作品で、コーヒー道を究めようとする人々の人間模様の「コーヒーと恋愛」を五戸真理枝の潤色・演出で上演。東憲司作、西川信廣演出「田園1968」は激動の時代だった1968年の地方都市の家族を通して時代と人間を描いた。秋元松代作、松本祐子演出「マニラ瑞穂記」はフィリピン独立に夢をかけた男たちと異国で体を売ること生き延びる女たちの物語。テネシー・ウィリアムズの名作「欲望

という名の電車」を文学座として30年ぶりに上演。ブランチは山本郁子で、高橋正憲が演出。原田ゆう作、所奏演出「文、分、異聞(ブン、ブン、イブン)」は1963年の文学座の分裂劇を描いた。

俳優座では、ロバート・アスキンス作、田中壮太郎演出「カミノヒダリテ」は悪魔という存在を介して信仰の本質を問うブラックコメディ。狂言、能に想を得た田中千禾夫作、森一演出「花子」「京時雨濡れ羽双鳥」、セバステアン作、小笠原響演出「ムッシュ・シュミットって誰だ?」は1本の電話をきっかけに不可解な出来事が次々と起こるコメディ。堀江安夫作、川口啓史演出「待ちぼうけの町」は東日本大震災から7年後の三陸を舞台に人生の一步を踏み出す人々の群像劇。

民藝では、アネット・ヘス作、長田育恵脚本、丹野郁弓演出「レストラン『ドイツ亭』」はホローコスト裁判を舞台に若いドイツ人女性の成長と葛藤を描いた。ブライアン・フリール作、シライケイタ演出「ルナサに踊る」は音楽やダンスを心の糧に貧しさの中でも気丈に生きた姉妹の物語。河本瑞貴作、丹野演出「忘れてもろうてよかとです」は佐世保のバーを舞台に社会の底辺に生きた女たちの戦後史を描く。デイヴィッド・ヘア作、丹野演出「モデレート・ソプラノ」はイギリスの田舎町にオペラハウスを建設した夫婦の姿を描く。稽古場でも部落差別をテーマにした島崎藤村の名作をもとに村山知義脚色、岡本健一演出「破壊」を上演。

青年座では、シライケイタ作、金澤菜乃英演出「ある王妃の死」は朝鮮王朝の王妃暗殺を巡る裏面史劇。マキノゾミ作、宮田慶子演出「横濱短編ホテル」は横浜のホテルを舞台に7つの短編が1つの物語に繋がる。中島淳彦作、黒岩亮演出「夫婦レコード」は1枚のレコードに刻まれた夫婦の記録と記憶の物語。注目の若手劇作家ピンク地底人3号作、宮田慶子演出「燐光のイルカたち」は、都市を分断する壁の近くにある店を舞台に過酷な現実を懸命に生きる兄弟の喪失と再生を描いた。

演劇集団円では、マーティン・マクドナー作、寺十吾演出「ピロマン」は児童殺人事件で拘留された兄弟の悲劇。内藤裕子作・演出「ソハ、福ノ倚ルトコロ」は滝沢馬琴を支えた人々の物語で、内藤は同舞台で紀伊国屋演劇賞を受賞した。

青年劇場は、金貸しに丸め込まれる庶民の悲

喜劇を描いた真船豊作、板倉哲演出「裸の町」、真理を求めて非科学的な思想と闘った戸坂潤を主人公にした古川健作、鶴山仁演出「真理の勇氣」を上演。斎藤憐作、大谷賢治郎演出「豚と真珠湾」は戦後まもない石垣島で「八重山共和国」を作ろうとした人々の姿を描き、瓜生正美構成・脚本、シライケイタ演出「殺意」は戦争で息子を亡くした母親の殺人未遂事件を通して戦争の傷の深さを描いた。

劇団昂では、バリー・リードの同名小説の舞台版「評決」は落ちぶれた弁護士の逆転劇が爽快で、演出は原田一樹。「ラビット・ホール」を田中壮太郎演出で上演し。師走恒例の「クリスマス・キャロル」で締めくくった。

文化座では、斎藤祐一脚本、西川信廣演出「しゃぼん玉」は強盗事件を起こした青年と老女の奇妙な共同生活から青年の更生を描く。オルコットの世界的な名作をもとに高瀬久男脚本、西川信廣演出「若草物語」は父が戦地に行った一家の4姉妹の成長を描く。

東演は、夢の新天地カナダを目指すフランスの若者が主人公のヴィルドラック作、鶴山仁演出「商船ティナシティ」、戦時中に演劇活動に熱い情熱を傾けた演劇人の姿を描いた三好十郎作、松本祐子演出「獅子の見た夢」を上演した。

銅鑼が創立50周年記念で上演したシライケイタ脚本、斎藤理恵子演出「泣くな研修医」は若き外科医の葛藤と成長を描いた。

朋友では、原田マハ原作、古川貴義脚本、大澤遊演出「本日は、お日柄もよく」はスピーチライターとして歩み始めた女性の成長物語。太田善也作、黒岩亮演出「コルセット」は下着メーカーを立ち上げた2人の再会の不協和音を描く。

扉座では、横内謙介の作・演出「神遊(こころがよい) 馬琴と華山」は滝沢馬琴と渡辺華山の交流を描き、「最後の伝令 菊谷栄物語 1937 津軽〜浅草」は浅草の人気レビューの座付き作家菊谷栄を主人公に戦争が迫る時代に生きた人々の姿を描いた。

劇団枚数童子は、サジキドウジ作、東憲司演出で、金魚問屋を舞台に家族の相克を描く「夏至の時」、ゴーリキーの「どん底」を下敷きにした「老いた蛙は海を目指す」は戦前の木賃宿に集まった貧しい人々がエネルギーに生きる群像劇。

ホリプロは、世界的に大ヒットした「ハリー・

ポッター」シリーズの舞台版「ハリー・ポッターと呪いの子」でロングランに挑戦した。大人になったハリー・ポッター(藤原竜也、石丸幹二、向井理のトリプルキャスト)と息子アルバスの対立を軸にした作品。ウィリアム・ギブソン作、森新太郎演出「奇跡の人」は家庭教師サリヴァン(高畑充希)が三重苦の少女ヘレン・ケラー(平祐奈)に言葉を教える壮絶な戦いを描き、ロルカ作、杉原邦生演出「血の婚礼」は結婚式を控えた花嫁(早見ひかり)と略奪した昔の恋人(木村達成)の悲劇。

シスカンパニーは、藤田俊太郎を演出に迎え、ポーラ・ヴォーゲル作「ミネオラ・ツインズ」を上演。性格が正反対の双子の姉妹(大原櫻子)が1950年代から80年代の激動の時代を駆け抜けたダークコメディ。ルーシー・カークウッド作、加藤拓也演出「ザ・ウェルキン」は、殺人犯の少女(大原櫻子)を裁く陪審員の12人の女たち(吉田羊)の二転三転する展開の最後に悲劇が待つ。北村想作、寺十吾演総「奇蹟」は記憶を失くした探偵(井上芳雄)と相棒の不思議な謎解きの旅。三谷幸喜作・演出「ショウ・マスト・ゴー・オン」は様々なアクシデントを乗り越えて舞台進行に悪戦苦闘する舞台監督(鈴木京香)らスタッフの姿を描いたコメディ。

井上ひさし作品を上演するこまつ座は、「貧乏物語」を24年ぶりに栗山民也演出で上演。大正時代のベストセラー「貧乏物語」を書いた経済学者河上肇が不在の河上家を舞台に妻(保坂知寿)をはじめ娘、女中など女性だけの出演者で本当の豊かさを問う作品。鶴山仁演出「紙屋町さくらホテル」は原爆投下3カ月前の広島のホテルを舞台に女主人(七瀬なつみ)と移動演劇さくら隊の演劇人の交流を描く。栗山演出「頭痛肩こり樋口一葉」は夭逝した明治の女流作家一葉(貫地谷しほり)と彼女を取り巻く女性たちの物語。鶴山演出「吾輩は漱石である」は、「修善寺の大患」と言われる夏目漱石(鈴木壮麻)が意識を失った30分間に去来する人々を通して描く評伝劇。東憲司演出「イヌの仇討」は、赤穂浪士の吉良邸討ち入りを巡り、吉良上野介(大谷亮介)ら討ち入られた側から見た歴史のからくりを焙り出す。

加藤健一事務所は事務所創立40周年、加藤健一役者人生50周年公演として、ニール・サイ

モン作、堤泰之演出「サンシャイン・ボーイズ」を上演。往年のボードヴィルのスターコンビ(加藤、佐藤B作)が再結成に意地の張り合いを繰り返す。ジャスティン・ブッチャー作、鶴山仁演出の一人芝居「スカラムーシュ・ジョーンズ or 七つの白い仮面」は道化師を意味するスカラムーシュと名付けられた男の世界を股にかけた放浪の物語。加藤はこの2作品の舞台成果で毎日芸術賞を受賞した。吉永仁郎作、黒岩亮演出「夏の盛りの蟬のように」は浮世絵師の葛飾北斎、娘のおえい、渡辺華山、歌川国芳ら江戸に生きたパワーある絵師たちの生きざまを描いた。

名取事務所は、別役実メモリアル3部作上演として「やってきたゴドー」「ああ、それなのに、それなのに」「病気」、暗い笑いに溢れた韓国のパク・ニョン作、小笠原響演出「そんなに驚くな」を上演し、その舞台成果で紀伊国屋演劇賞団体賞を受賞した。イプセン作「民衆の敵」をもとにした瀬戸山美咲の翻案・演出「ペーター・ストックマン」は弟の告発を潰そうとする町長を女性(森尾舞)が演じ、作品に新たなスポットを当てた。

トムプロジェクトは、古川作、日澤演出「芸人と兵隊」、水谷龍二作・演出の風間杜夫のひとり芝居「帰ってきたカラオケマン」再演のほか、ふたくちつよし作・演出「無言のまにまに」は戦争で亡くなった若き画家の絵の展示館開設に奔走する男たちの物語。大東憲司作・演出「エル・スール」は戦後の博多で遅く生きる人々の姿を描く。

CATプロデュースは、東京パラリンピック開会式を演出したウォーリー木下の原案・演出「僕はまだ死んでいない」は閉じ込め症候群の主人公と周囲の人々の人間ドラマ。アーネスト・トンプソン作、鶴山仁演出、高橋恵子主演「黄昏」は死を意識し始めた老夫婦のひと夏を描く。スペインのセルヒオ・ブランコ作、大澤遊演出「デーバスランド」は劇作家と父親殺しの受刑者を巡る、甲本雅裕と浜中文一の二人芝居。ニール・サイモン作、元吉庸泰演出「裸足の散歩」は新婚夫婦にアパート住人が絡むコメディ。

無名塾の仲代達矢は役者70周年を迎え、3月に松本清張の短編をもとにした「左の腕」に主演。10月には山本周五郎原作「いのちぼうにふろう物語」を石川・能登演劇堂で1か月間公演

を敢行。亡くなった妻隆巴の脚本・演出で、深川の一膳飯屋の主人幾三を演じた。

オフィスコットーネでは、ディレンマット作、稲葉賀恵演出「加担者」はマフィアのボスに拾われた元生物学者の姿を描く。公演後、代表であるプロデューサーの綿貫凛さんが58歳で亡くなった。30代でプロデューサーとして独立し、大竹野正典の作品を数多く上演したほか、チラシに演出家と並んでプロデューサー綿貫凛の名前を掲載するなど、陰に隠れがちなプロデューサーの地位向上にも努めた。

海外からの来日公演も実現した。フランスの国立オデオン劇場はテネシー・ウィリアムズの名作「ガラスの動物園」で来日。オランダの世界的演出家イヴォ・ヴァン・ホーヴェの演出、フランスの人気俳優イザベル・ユペールのアマンダ役で、従来の作品イメージを見事に覆し、衝撃的な舞台だった。ルーマニアの国立劇場ラドゥ・スタンカ劇場による「スカレット・プリンセス」は、鶴屋南北作「桜姫東文章」をもとにシルヴィウ・ブルカレーテが潤色・演出した。

演劇人の訃報も相次いだ。文学座の渡辺徹さんが61歳で亡くなった。研究生の時に人気ドラマ「太陽にほえろ!」に抜てきされ、人気者となり、バラエティ番組のMCなどで活躍した。一方で、文学座の大先輩北村和夫さんの後を継いで「花咲くチェリー」に主演するなど精力的に舞台にも出演した。海外では英国の演出家ピーター・ブルックさんなど妖精が飛び交う森の情景を作り出したシェクスピア作「真夏の夜の夢」、上演時間9時間の「マハーバーラタ」で世界の演劇界に大きな影響を与えた。劇団「遊園地再生事業団」を主宰した劇作家で演出家の宮沢章夫さんは65歳で亡くなった。日常を乾いた視点で描く作品が多く、「ヒミネ」は岸田戯曲賞を受賞した。

#### はやし・なおゆき

2020年に退社するまで日刊スポーツ新聞社で主に演劇・演芸を担当し、年間300本以上の舞台を観劇。文化庁芸術祭、芸術選奨、鶴屋南北戯曲賞の選考委員、国立劇場養成事業委員会委員などを務める。



[ミュージカル]

## 2022年のミュージカル — コロナにめげず多彩な作品

横溝幸子

2020年から始まった新型コロナウイルスは終息せぬまま、22年は年初から第7波襲来による休演や中止が夏まで続いた。秋から第8波の影響が出始めたが、多くの劇場は全客席を開放し、客足も戻った。ミュージカル界もコロナに痛めつけられながら、初演物、再演物、オリジナル作品、20年の中止作品などを次々上演しにぎわった。内容も漫画、アニメ、ゲーム、テレビドラマ、映画、小説などを原作にしたミュージカル化がふえ、テーマも人種や性差別、ジェンダー、権力闘争、反戦、恋愛、友情、親子の絆、自分探し、どたばたコメディ、ミステリー物と種々雑多。古き良き時代のブロードウェイ・ミュージカルと同時に最新作もすぐ上陸する。ロンドン、ウィーン、韓国などミュージカルの国籍も多彩だ。

### コロナ禍の「ラ・マンチャの男」

夏恒例の「ピーター・パン」や日生劇場ファミリーフェスティバル「リトル・ゾンビガール」の中止は親子観劇の楽しみを奪った。とくに気の毒だったのは「ラ・マンチャの男」ファイナル公演(2月6日～28日 日生劇場)である。1969年に市川染五郎が初演、70年に単身ブロードウェイで主演し、松本幸四郎を経て79歳になった二代目松本白鸚が53年間の最後を飾る記念公演が、25回のうち7回のみで中止された。東宝は白鸚80歳の誕生日(8月19日)に23年4月14日～24日までよこすか芸術劇場での復活公演を行うと発表した。「松本白鸚 傘寿にして挑み続ける 幻のファイナル公演が奇跡の復活!」の宣伝文句のもと「見果てぬ夢」はまだ続きそうだ。

### 劇団四季「バケモノの子」ロングラン

劇団四季はコロナ禍の中でも全国展開を続け、東京で「アラジン」[海]、「アナと雪の女王」[春]、「ライオンキング」(有明四季劇場)をロングラン中だが、さらに細田守監督アニメーシ

ョン映画「バケモノの子」(高橋知伽江脚本・作詞 富貴晴美音楽 青木豪演出)をミュージカル化した。孤独な少年蓮が渋谷の町からバケモノの異世界に迷い込み、乱暴者の熊徹に弟子入りして強くなってゆく。特殊メイクやパペットを活用し、複雑な舞台機構を駆使して壮大なスケール感を出した(4月30日～23年3月21日〔秋〕)。

「美女と野獣」が、浦安のディズニリゾートにある舞浜アンフィシアターで開幕した。1995年に「東京・大阪同時ロングラン」で初演以来、総公演数5600回、536万人を動員した作品が初めてディズニーの本拠地に進出した。円形ステージを額縁舞台に改修し、美術、台本、演出も新しく、ベルが歌う「チェンジ・イン・ミー」の新曲も加わっての新版だ(10月23日～ロングラン)。劇団四季は2023年7月14日、創立70周年を迎える。22年はコロナでの公演中止もあったが、全国巡演を含めて2328回、観客動員数は245万607人に達した。

### 初演の海外ミュージカル

海外作品は大作から小品まで多彩。20年上演予定だった「ヘアスプレー」「モダン・ミラー」「ボディガード」が力が入った舞台になった。

「ヘアスプレー」(マーク・オドネル/トーマス・ミーハン脚本 スコット・ウィットマン歌詞 マーク・シェイマン歌詞・音楽)は、映画や2度の来日公演でおなじみだが、日本人キャスト版は初めて。1960年代のアメリカ・ボルトティモア。ビッグサイズ的女子高生トレイシーがテレビの人気ショー番組のダンサーを目指しオーディションを受けに行く。登場人物の中に黒人もいるのだが、最近では黒塗りのメイクをしないため、黒人と白人との間で起こる人種差別がわかりにくい。ミュージカル初挑戦の渡辺直美のトレイシーは、懸命に歌い踊り、明るさを振りまいた。山口祐一郎の母親のビッグサイズぶりも凄い。「グッドモーニング・ボルトティモア」は名曲だ。9月17日初日がコロナで19日に

変更された。10月2日まで東京建物Brillia HALL公演後、11月20日まで博多座、梅田芸術劇場、御園座を巡演した。大千秋楽で渡辺直美は20kgやせたと報じられた。演出は山田和也。

「モダン・ミリー」は67年公開のジュリー・アンドリュース主演映画の楽曲を02年に一新しトニー賞6部門を受賞した。1920年代、田舎からニューヨークにきたミリー(朝夏まなと)は、玉の輿を狙って社長トレヴァー(廣瀬友祐)に猛アタックする話にホテルオーナー(一路真輝)の人身売買事件が交錯する。朝夏のあけつびろげの明るさと一路の豹変ぶり、廣瀬のコメディセンスが面白い。演出は小林香(9月7日～26日 シアタークリエ)。

梅田芸術劇場制作「ボディガード」(ローレンス・カスダン作 アレクサンダー・ディネラリス脚本 クリス・イーガン編曲 ジョシア・ベルカッタ演出・振付)は、ケビン・コスナーとホイットニー・ヒューストン主演映画を2012年英国でミュージカル化した。すでに英国キャストが来日している。日本版は20年に大阪で5回公演ただけでコロナで中止されたため東京は初演である。謎のストーカーに付きまといられる人気絶頂の歌手レイチェルと雇ったボディガード(大谷亮平)との関係は? ミステリータッチで隙がない。レイチェルはトリプルキャスト。ダンスが得意の柚希礼音、歌唱力抜群の新妻聖子、スタイリッシュなMay J.と三人三様の微妙な違いが面白く見える(1月21日～31日梅田芸術劇場、2月8日～19日 東京国際フォーラム ホールC)。

Hey! Say! JUMPの藪宏太がアンドリュー・ロイド＝ウェバー作曲「ジョセフ・アンド・アメージング・テクニカラー・ドリームコート」のジョセフを軽やかに演じたのに続き、ポップな青春ミュージカル「ビー・モア・チル」(ジョー・トラックス脚本 ジョー・アイコニス音楽・歌詞)では、高校生のジェレミーを主演するというように、ジャニーズ事務所のタレントがミュージカルで実力を発揮している。

エルヴィス・プレスリーの徴兵エピソードにヒントを得て作られた「バイ・バイ・バーディー」(マイケル・スチュアート原作 リー・アダムス作詞 チャールズ・ストラウス音楽)では松下優也のバーディー、長野博のマネージ

メント会社社長。「盗まれた雷撃パーシー・ジャクソン・ミュージカル」は、ポセイドンの息子パーシーを岡本圭人が、「スクルージ」で若き日のスクルージと好青年のハリーを相葉裕樹が演じるというように若手の活躍が目立つ。2.5次元ミュージカルの「テニスの王子様」出身者が増えてきた。

制作プロダクションがホリプロに移っての初演作「ブラッド・ブラザーズ」(ウィリー・ラッセル脚本・作詞・作曲)は、貧しいジョンストン家に生まれた双子兄弟のミッキー(柿澤勇人)と金持ちの家にもられたエドワード(ウエンツ瑛士)の血の宿命による悲劇。なぜもらえるのが自分ではなかったのかというミッキーの悲痛な叫びが心を打つ。堀内敬子の貧しく非常識な母親と一路真輝の知的な母親の差もくっきり出た(3月21日～4月3日 東京国際フォーラム ホールC)。

異色作はタチ・ワールド制作「ファンタスティックスーパー・ボーイ・ミーツ・ボーイ版」だろう。ハーヴェイ・シュミットの音楽はそのまま使い、2021年春、トム・ジョーンズが隣土士の少年少女の愛をルイスとマットの男同士に書き替えた。その最新作を演出の勝田安彦が取り上げた。視覚的にはハンサムボーイ同士の配役が望ましい(9月14日～19日 ウッディシアター中目黒)。

韓国ミュージカルの「BLUE RAIN」は「カラマーゾフの兄弟」をベースにしたサスペンスミュージカル。「ルードヴィヒ」は同じ作・演出チュ・ジョンファの新作。ベーターヴェン(中村倫也)の激しい生き方に強い影響を与えるマリー(木下晴香)が個性的だ。

## 海外物の再演は大作揃い

東宝は再演作も大作を並べた。松本白鸚の「ラ・マンチャの男」をはじめ、浦井健治の「笑う男」、大竹しのぶの「ピアフ」、花總まり・愛希れいかの「エリザベート」、森公美子・朝夏まなとの「天使にラブ・ソングを」と人気作ばかり。久しぶりの「ガイズ&ドールズ」(6月9日～7月9日 帝国劇場)では、演出にマイケル・アーデンを起用した。39歳以下でトニー賞に2度もノミネートされた新進気鋭の演出家に早くも目をつけた東宝の判断は的確だ。井上芳雄の大作

ギャンブラースカイに対して浦井健治のネイサン、明日海りおの救世軍軍曹、望海風斗のネイサンの婚約者アデレイドという豪華な顔ぶれだ。望海は21年4月、宝塚歌劇雪組のトップスターから、女優に転身したばかり。1月の「イントゥ・ザ・ウッド」の魔女役に続き、アデレイドでも圧倒的な歌唱力でエネルギーのほとばしりを見せた。新たなミュージカル女優の誕生だ。

シアタークリエでの「ダディ・ロング・レッグズ」は、井上芳雄の足長おじさんジャーヴィスに対して、孤児院育ちのジルーシャに上白石萌音が挑戦した。前向きに歩む上白石と役が重なり合い、好カップルが生まれた。

「ネクスト・トゥ・ノーマル」(ブライアン・ヨーキー脚本・歌詞 トム・キット音楽)は前回のマイケル・グライフ演出に代わり、上田一豪が日本独自の演出、美術で2チーム制での再演である。息子を亡くした母ダイアナ(安蘭けい・望海風斗)は空想の中で息子がどんどん成長してゆく。双極性障害を患うダイアナを通して家族のあり方や心の病との向き合い方など、現代社会が抱える問題が描かれるが、どうしてもテーマが暗くなる。

東宝が1967年に初演した「ファンタスティックス」が久し振りに上演された。隣同士堀越しに愛を語るマット(岡宮来夢)とルイーザ(豊原江理佳)。マットの父(斎藤司)とルイーザの父(今拓哉)がさ細な喧嘩をする。こちらはボーイ・ミーツ・ガール版。誘拐劇を演じるエル・ガヨに元宝塚歌劇団男役の愛月ひかるを起用した。男役としての格好良さで見せるが、かつてエル・ガヨを持ち役にした宝田明のような男の色気が乏しいのが残念だった(10月23日～11月14日 シアタークリエ)。

「ジャージー・ボーイズ」は、「トワング」という唱法で歌うフランキー・ヴァリ役が、これまで中川晃教しか歌えなかった。この公演では新たに4オクターブの声を持つという花村想太が加わり、Wキャストでの配役が可能になった。

帝劇での「ミス・サイゴン」は30周年記念公演で、8月21日夜の部で公演回数1500回に達した。初演からエンジニアを演じ続けた市村正親は、10月30日の博多座公演で初演から900回という記録を樹立した。今回は地方を含めて4カ月の長期公演に備え、エンジニアは市村正親の

ほかに駒田一、伊礼彼方、東山義久の4人を揃えた。キムは高畑充希、昆夏美、屋比久知奈、クリスは小野田龍之介、海宝直人、チョ・サンウンのトリプルキャストというように配役も複雑だ。

市村はホリプロ制作の「ラ・カージュ・オ・フォール」のアルバムで男同士の愛を哀感をこめて「ありのまま」「見てごらん」を歌った。さらに「スクルージ」では金に執着する孤独な老人が3人の精霊によって人間性を取り戻すまでを細やかに演じ、73歳という年齢を感じさせぬ活躍ぶりだった。2023年2月26日～28日に、「役者生活50年」を記念して日生劇場で「市村座」を開催する。

坂本昌行はシーエイティプロデュースの「MURDER For Two」(ケレン・ブレア作・作詞 ショー・キノシアン音楽 スコット・シュワルツ J・スコット・ラップ演出)のスリラーミュージカルで海宝直人と13役を演じ分けた(1月8日～23日 シアターコクーン)ほか「THE BOY FROM OZ」では、ピーター・アレンの波乱の人生を演じた。鳳蘭のジュディ、紫吹淳のライザと05年の初演時からの顔ぶれで安定した舞台を見せた(6月12日～7月3日 東急シアターオーブ)。

シーエイティは川平慈英、長野博、松岡充、鈴木壮麻の4人で見せる「Forever Plaid」はじめ「ダブル・トラブル」では、出演者を変えて「夏シーズン」から「冬シーズン」まで長期公演を企画。作曲家ジャニーと作詞家ボビー兄弟に相葉裕樹、浜中文一、林翔太など歌える若手が配役され、2人で10人を早替わりするミュージカル・コメディなど多くのミュージカルの制作に力を入れている。

「メリー・ポピンズ」は4年ぶりの再演で、濱田めぐみ、笹本玲奈が新たに加わった。「キンキーブーツ」は、ドラッグクイーンのローラ役が三浦春馬から城田優に代わり、「ピピン」の若き王子は、城田優から森崎ウィンに代わるなど、再演物も俳優や演出で少しずつ配役が変わっている。

## 優れたオリジナルミュージカル

漫画やアニメ、映画などを原作にしたオリジナル作品が目立つ中で、東宝の「リトルプリン

ス」「四月は君の嘘」「スラムドッグ\$ミリオネア」、ホリプロの「COLOR」「東京ラブストーリー」が優れている。

「リトルプリンス」は「シャボン玉とんだ宇宙までとんだ」に続き音楽座の名作を東宝が上演権を得て取り上げた作品。井上芳雄の飛行士、花總まりの花に対して、王子を加藤梨里香とWキャストで演じた土居裕子の王子の若々しきは驚異的。音楽座時代の王子役がちらついた。

「四月は君の嘘」は新川直司の漫画が原作。アニメや映画になった。坂口理子脚本、フランク・ワイルドホーン作曲、上田一豪演出。ピアノコンクールで優勝した有馬公生(小関裕太・木村達成)は母の死をきっかけにピアノの音が聞こえなくなる。ヴァイオリニストの宮園かをり(生田絵梨花)の演奏を聴き、公生の心に音が色づき始める。大切な人との出会いと別れの中で音楽が深くかわりながら成長して行く。音楽の魅力が詰まった青春ラブストーリー(5月7日～29日 日生劇場)。「スラムドッグ\$ミリオネア」は、同名タイトル映画の原作小説「Q&A」(ヴィカス・スワラップ作)を舞台化(瀬戸山美咲上演台本・作詞・演出)した。スラム育ちのラム(屋良朝幸)は、インドの国民的タレント、プレム(川平慈英)司会のクイズ番組で全12問を正解するが、不正を疑われ逮捕され、拷問を受ける。華やかなクイズショーの合間にラムの壮絶な人生とスラムの子どもの達や格差社会が描かれる。悪党に追われるラムが障害物を乗り越えながら移動するスポーツ「パルクール」を軽々と見せる屋良の身体能力が素晴らしい。川平慈英の司会者が巧み(8月1日～21日 シアタークリエ)。

「東京ラブストーリー」(柴田ふみ原作 佐藤万里脚本・歌詞 ジェイソン・ハウランド作曲 豊田めぐみ演出)は、サラリーマンの完治(柿澤勇人・濱田龍臣)が東京に転勤になり、アフリカ育ちのリカ(笹本玲奈・唯月ふうか)に振り回される。旧友の健一(廣瀬友祐・増子敦貴)が付き合っているさとみ(夢咲ねね・熊谷彩春)は完治の初恋の人だった。4人の若者が織りなす恋愛模様を(空)キャストと(海)キャストで演じ分ける青春物(11月27日～12月18日 東京建物Brillia HALL)。

「COLOR」は草木染作家・坪倉優介の体験談

をもとに高橋知江江脚本・歌詞、小山ゆうな演出で音楽は「トイレの神様」で知られる植村花菜がミュージカルに初挑戦した。バイク事故で記憶喪失になった草太が母(濱田めぐみ・柚希礼音)の愛や多くの人々との出会いで少しずつ色を感じてゆく。その心象風景が細やかに描かれた。草太と様々な人物を浦井健治と成河が交互に演じ分けて健闘した(9月5日～25日 新国立劇場小劇場)。

溝口健二監督映画「夜の女たち」がミュージカル化(長塚圭史台本・演出 荻野清子音楽)され、江口のりこ、前田敦子、伊原六花が3人の女の壮絶な人生を熱演した(9月3日～19日 神奈川芸術劇場)。「銀河鉄道999」では神田沙也加に決まっていたメーテル役を花總まりが演じた。

作曲家岩代太郎が音楽と言葉を結ぶ新たな試みを奏劇と銘うっての公演で、「Trio」(土城温美脚本 深作健太演出)は孤児院育ちの3人(三宅健、藤木直人、大鶴佑助)が大人になった時ハーモニーが崩れ去る。花道風の三角形の舞台に立つと、その時々の人間関係がわかり、バンドネオン、チェロ、ピアノのトリオが奏でる音楽と俳優の言葉が一つになってゆく。俳優は台本を持ったまま演じるが朗読劇とは異なる(12月15日～24日 よみうり大手町ホール)。

イッツフォーリーズが「洪水の前」(矢代静一・藤田敏雄脚本 いずみたく音楽 鶴山仁演出)を25年ぶりにラサール石井の司会者役で再演した。初演では財津一郎が演じた役だ。音楽座の「ラブ・レター」(浅田次郎原作)は白蘭が書き綴った吾郎へのラブレターが心にしみる。

## コロナ禍の宝塚歌劇団

年初から東京宝塚劇場花組「元禄パロッドロック」が、コロナで一部公演中止されるなど、コロナに痛めつけられる1年になった。東京中心にまとめると雪組特別公演「ODYSSEY」(1月10日～22日 東京国際フォーラム ホールC)、「心中・恋の大和路」(8月3日～9日 日本青年館)も中止された。宝塚歌劇団の主権ではないが、高沙巴、寿ひずる以下宝塚のOGが集っての峰さを理チャリティコンサート「愛の旅立ち」(7月22日～23日宝塚バウホール、7月29日 日本青年館)の中止は、峰ファンには痛手だった。

「元禄パロックロック」は谷貴矢の大劇場デビュー作。柚香光が相手役に元宙組の娘役トップの星風まどかを得ての新コンビお披露目作でもあった。元赤穂浪士で時計職人クロノスケ(柚香)が惹かれた賭場の女主人キラ(星風)はコウズケノスケの娘だったという忠臣蔵ファンタジー。1月2日～2月6日の公演が1月8日～29日を休演する中抜き公演になったのが残念だった。

月組「今夜、ロマンス劇場で」(小柳奈穂子作・演出)は月城かなと・海乃美月の新トップコンビお披露目。助監督牧野健司(月城)がモノクロ映画のヒロイン美雪(海乃)に恋をする。そしてスクリーンから飛び出した美雪に振り回される健司。現実と映画の世界を映像でつなぐ大人のファンタジーで、小柳奈穂子の実力が発揮された。ショーの中では、「今夜、ロマンス劇場で」に続くジャズ・オマージュ「FULL SWING!」(三木章雄作・演出)がジャズの魅力をたっぷり味あわせてくれた(2月25日～3月27日)。

雪組「夢介千両みやげ」(山手樹一郎原作 石田昌也脚本・演出)は彩風咲奈の夢介の素朴さと優しさにスリのお銀(朝月希和)が惚れる、おらかな作品(5月6日～6月12日)。星組「めぐり会いは再び―真夜中の依頼人」(小柳奈穂子脚本・演出)は筋立てがわかりにくい、礼真琴の伯爵の末裔ルーチェの明るさで見せてしまう(6月18日～7月24日)。花組「巡礼の年―リスト・フェレンツ、魂の彷徨〜」(生田大和作・演出)は7月30日～9月4日が途中4日間と千秋楽のみの公演で新人公演もなくなった。宙組「HIGH & LOW」(HI・AX原作 野口幸作脚本・演出)は暴力シーンをダンスシーンで巧みに見せた真風涼帆の健闘も見逃せない(10月8日～11月20日)。本公演の中で再演物の小池修一郎作・演出の宙組「Never Say Goodbye」(4月2日～5月1日)、月組「グレート・ギャツビー」(9月10日～10月9日)が優れている。宙組の真風涼帆は相手役に星風まどかから新たに潤花を得て戦争カメラマンを骨太に演じ、月組の月城かなとはデージー(海乃美月)を想う男の哀愁を漂わせた。雪組「蒼穹の昴」(11月26日～12月25日)は浅田次郎原作の大作。科挙の試験に合格した梁文秀(彩風咲奈)が清朝のために改革をはかるが…。トップ娘役朝月希和の退団公演だ。美術も衣裳も豪

華。脚本・演出の原田諒念願の作品だが、原田はセクハラ疑惑を週刊誌に暴かれて12月26日付で退団した。将来を期待されていた演出家の上田久美子が3月31日付で退団した。2022年はトップスターの退団はなく、トップ娘役の朝月希和ら35人が卒業した。

## 来日公演も盛ん

コロナにもめげずアダム・クーパーが来日し、「雨に唄えば」(2月2日～13日 東急シアターオーブ)をずぶ濡れになりながら楽しんで演じていた。1月22日の初日を遅らせての勇気ある公演だった。「RENT」(5月18日～29日 東急シアターオーブ)は2000年の初来日から9度目。「コーラスライン」(8月11日～28日 オーチャードホール)もおなじみ。

「シカゴ」はブロードウェイのリバイバル版から25年を記念して、米倉涼子が11月ブロードウェイの舞台に立ち、凱旋公演をうたい文句に来日の予定だったが、米倉が腰痛で降板したため、来日公演を行ったのは、ブロードウェイからではなく、ロンドン・ウェストエンドのキャストを中心とする「シカゴオールスターズ・カンパニー」だった(12月14日～31日 東京国際フォーラム ホールC)。ニューイヤーコンサートや「クリスマス・ワンダーランド」などで、歌手やダンサーの来日も盛んになった。

## ジャニーズ事務所は騒動も

ジャニーズ事務所は「ジャニーズ・アイランド THE NEW WORLD」(1月1日～26日)、堂本光一の「Endless SHOCK—Eternal—」(4月10日～5月31日)、「DREAM BOYS」(9月8日～30日)、A.B.C-Zによる「ジャニーズ伝説2022」(12月5日～22日)を帝国劇場で上演したほか、新橋演舞場ではSnow Man主演「滝沢歌舞伎 ZERO 2022」(4月6日～5月16日)、京本大我主演オリジナルミュージカル「流星の音色」(藤井清美脚本 滝沢秀明演出)、HiHi Jetsや美少年による「少年たち あの空を見上げて」(9月11日～10月13日)を上演した。シアタークリエでは、ふぉ～ゆ～が「Only1, NOT No.1」でダンスエンターテインメント集団梅棒と共演した。ダンスだけで物語を構成する新たな舞台への挑戦である(7月6日～26日)。グループから離れて個人

参加の舞台も多く人気度も抜群だ。演出を担当した滝沢秀明がタレント育成をするジャニーズアイランド社長を9月26日付で、ジャニーズ事務所副社長を10月31日付で退任・退所した。アイランド社長に井ノ原快彦が就任したが、King & Princeの平野紫耀、岸優太、神宮寺勇太の3人の退所が決まるなど揺れている。

訃報として「アニーよ銃をとれ」「キス・ミー・ケイト」「マイ・フェア・レディ」「ファンタスティックス」など日本のミュージカルに貢献した宝田明さん(87)が3月14日、「キャッツ」のグリザベラ、「エビータ」など劇団四季のミュージカルを支えた久野綾希子さん(71)が8月22日に亡くなった。

## 2022年のミュージカル・ベスト10

ミュージカル界の全体像をつかむには、専門誌「ミュージカル」による2022年度ミュージカル・ベスト10が参考になる(評論家・ジャーナリスト21名選出)

### 〈作品BEST10〉

- 第1位「バケモノの子」(劇団四季 演出 青木豪)
- 第2位「ガイズ&ドールズ」(東宝 演出 マイケル・アーデン)
- 第3位「ヘアスプレー」(東宝 演出 山田和也)
- 第4位「リトルプリンス」(東宝 演出 小林香)
- 第5位「今夜、ロマンス劇場で」(宝塚歌劇団)演出 小柳奈穂子
- 第6位「スラムドッグ\$ミリオネア」(東宝 演出 瀬戸山美咲)
- 第7位「蒼穹の昴」(宝塚歌劇団 演出 原田諒)
- 第8位「ブラッド・ブラザーズ」(ホリプロ 演出 吉田鋼太郎)
- 第9位「四月は君の嘘」(東宝 演出 上田一豪)
- 第10位「モダン・ミリー」(東宝 演出 小林香)

### 〈再演賞〉

「ダディ・ロング・レッグズ」(東宝 演出 ジョン・ケアード)

### 〈演出家賞〉

小池修一郎(「NEVER SAY GOODBYE」「るろうに剣心京都篇」「グレート・ギャツビー」「エリザベート」)

### 〈男優BEST10〉

- 第1位 井上芳雄(「リトルプリンス」「ダディ・ロング・レッグズ」「ガイズ&ドールズ」)
- 第2位 柿澤勇人(「ブラッド・ブラザーズ」「東京ラブストーリー」)
- 第3位 市村正親(「ラ・カージュ・オ・フォール」「ミス・サイゴン」「スクールジ」)
- 第4位 坂本昌行(「マダー・フォー・トゥー」「THE BOY FROM OZ」)
- 第5位 浦井健治(「笑う男」「ガイズ&ドールズ」「COLOR」)
- 第6位 伊礼彼方(「ブラッド・ブラザーズ」「ミス・サイゴン」「フィスト・オブ・ノーススター」)
- 第7位 屋良朝幸(「EDGES」「スラムドッグ\$ミリオネア」「りんご」)
- 第8位 廣瀬友祐(「INTO THE WOODS」「モダン・ミリー」「東京ラブストーリー」)
- 第9位 松本白鸚(「ラ・マンチャの男」)
- 第10位 中川晃教(「CROSS ROAD」「ジャージー・ボーイズ」)
- 第10位 花村想太(「ジャージー・ボーイズ」)

### 〈女優BEST10〉

- 第1位 望海風斗(「INTO THE WOODS」「ネクスト・トゥ・ノーマル」「ガイズ&ドールズ」)
- 第2位 上白石萌音(「ダディ・ロング・レッグズ」)
- 第3位 渡辺直美(「ヘアスプレー」)
- 第4位 大竹しのぶ(「ピアフ」)
- 第5位 土居裕子(「リトルプリンス」)
- 第6位 濱田めぐみ(「メリー・ポピンズ」「COLOR」)
- 第7位 花總まり(「リトルプリンス」「銀河鉄道999」「エリザベート」)
- 第8位 生田絵梨花(「四月は君の嘘」)
- 第8位 高畑充希(「ミス・サイゴン」)
- 第10位 天海祐希(「薔薇とサムライ2」)
- 第10位 愛希れいか(「エリザベート」)

### よこみぞ・ゆきこ

演劇評論家。日本演劇協会理事。都民劇場評議員。歌舞伎サークル企画委員。時事通信社文化部編集委員を経て文化庁芸術祭審査委員、芸術文化振興会演劇専門委員、日本大学芸術学部非常勤講師を歴任。著書に「夢を語る役者たち」ほか。

## [地方演劇]

## 2022年の地方演劇概況

森 洋三

2022年は沖縄が佐藤栄作首相時代の1972年(昭和47年)5月15日をもって本土に復帰して50年。22年の地方演劇概況をまず沖縄演劇に焦点を合わせたい。私事になるが、新聞記者だった筆者は沖縄の本土復帰前夜、船で那覇港に入港、復帰第1日取材したが、戦跡地・糸満市摩文仁のはずれにあるひめゆりの塔、地下壕を訪れた際の強烈な印象がいまも重く残る。広島に投下された原爆による死者は約14万人(同市の推計)、長崎では約7万人(同市推計)。沖縄では軍人・軍属の約8万人を別にして、一般人の死者が14万人以上だったことを改めて胸に刻み込みたい。

## 感んだった沖縄の本土復帰50周年企画

当然のことながら沖縄の各劇団や劇場は「本土復帰50周年企画」を数多く取り上げた。なかでもエーシーオー沖縄(沖縄市、下山久代表)は22年3月から1年間かけ那覇市の文化芸術劇場なはーと小劇場(約250席)、ひめゆりピースホール(約80席)などを会場に7作品の連続上演と総力体制で臨んだ。同劇団は1992年に創立、沖縄芸能を取り入れた沖縄発信のオリジナル作品を上演してきている。

3月になはーと小劇場でスタートした復帰企画第1作は「密航者～波濤をこえて」(嶋津与志脚本、眞鍋卓嗣演出)。沖縄より19年早く日本復帰した奄美群島からアメリカ・沖縄へ“国境を越えて”密航した女性を描く、沖縄の本土復帰以前に焦点を合わせた作品だ。また民謡酒場で働く二人の女が沖縄戦や戦後の生活を歌と踊り、語りで演じる名作「島口説(しまくどうち)」(謝名元慶福作、藤井ごう演出)は9月に浦添市・与那原町・西原町・南風原町の4ホールで連続公演した。

さらに「はてしない物語～オキナワでゴドーを待ちながら」(ベケット作、藤井ごう翻案・演出)、扇田拓也の脚本・演出による新作「ハベル～不思議の国のモモト」、東京の名取事務所との

共同制作として内藤裕子書き下ろし、演出した「カタブイ、1972」(カタブイ=片降り)、「沖縄燦燦」(三隅治雄作・演出)、「与那覇家の食卓」(伊波雅子脚本、藤井ごう演出)まで7作の上演。

このうち「島口説」は5月に東京・新大久保の労音大久保会館で、「カタブイ、1972」は11月末から12月中旬にかけて下北沢・小劇場B1でも上演した。

21年10月末に那覇市の「新文化芸術発信拠点」として開館した那覇文化芸術劇場なはーとは5月に小劇場で「沖縄・復帰50年 現代演劇集inなはーと」(那覇市・おきなわ芸術文化の箱主催)を企画。沖縄の現代演劇界を代表する劇団ピーチロック(名護市)、劇団O.Z.E(那覇市)、劇団おとな団(那覇市)の3劇団がそれぞれ代表作「オキナワ・シンデレラ・ブルース」(新井章仁作・演出)、「72'ライダー」(真栄平仁作・演出)、「9人の迷える沖縄人」(安和学治・国吉誠一郎作、当山彰一演出)を上演。

なはーとは11月に沖縄「復帰」50年特別企画「喜劇 人類館」(知念正真作、佐藤尚子・知念あかね演出)も小劇場で企画上演。1903年に大阪で開かれた勸業博覧会会場近くの見世物小屋で他地域の人たちと一緒に琉球人が展示されるという“人類館事件”が起きた。事件をモチーフに知念正真が描いた沖縄初の岸田國土戯曲賞受賞作品。沖縄演劇の傑作とされ、全4公演がほぼ満席の盛況で迎えられた。

国立劇場おきなわ(浦添市)も琉球芸能を中心に様々な復帰企画を実施したが、10月に沖縄初の芥川賞受賞作家・大城立裕の喜劇「トローメー万歳」(嘉数道彦演出)を大劇場(約630席)で上演している。このほかにも沖縄の多数の劇団が様々な形で「復帰50年」に取り組んだが残念ながら割愛する。

一方、東京や関西の劇団などによる沖縄公演もあった。文化座が伊江島の島ぐるみ反基地闘争を取り上げた「命どう宝」(杉浦久幸作、鶴山仁演出)を2月に那覇市、名護市で、新国立劇場

演劇研修所第16期生による朗読劇「ひめゆり」(瀬戸口郁脚本、道場禎一・西川信廣構成、西川演出)が9月に国立劇場おきなわ小劇場で上演された。沖縄出身の劇団青年座(座友)の津嘉山正種がひとり語り「戦世(いくさゆう)を語る」を6月、沖縄タイムスホールで3年ぶりに行った。

### 老いやボケ、身体障害を越えてチャレンジ

いま身体的な障害や高齢を克服した、あるいは焦点を当てた市民演劇活動が徐々に盛んになりつつある。“老い”と“ボケ”と“死”をテーマに徘徊演劇などユニークな活動を続けている劇団「OiBokkeShi」(岡山県奈義町、菅原直樹代表)が10月、三重県総合文化センター知識の広場でロンドンのEntelechy Artsと共同製作した「Moving Day～引っ越しの日」(構成演出・菅原直樹)を上演。日英が同じテーマで短編演劇を作成して後日、互いの作品を映像で鑑賞して高齢者を取り巻く環境などを相互に意見交換するという企画。三重県文化会館がアートプロジェクトで公募したメンバー多数が参加した。菅原は2015年に88歳の岡田忠雄(現在95歳の看板俳優)を主演に自身も参加して「20年ぶりに帰省した男性が故郷の商店街を(観客とともに)歩く」という手法の“認知症徘徊演劇”を創設して第1作「よみちにひはくれない」(構成演出・菅原)を披露。2018年9月には「世界ゴールド祭2018日本」に参加、埼玉・浦和駅周辺でも上演されている。

子どもたちの演劇活動では、東海3県の聴覚障害の子どもたちが参加する**デフキッズプロジェクト**が8月に岐阜市文化センター小劇場でオリジナル手話劇「25日目のネコたち～ニャンともステキな宝探し」(平井千加子作・演出)を上演。字幕付き、劇団あとの祭りなどが声優として協力した。5月に新潟市東区プラザホールでは知的障害などのある子どもと家族で結成した**市民劇団わくわく**が3年ぶりに痛快時代劇「ねずみ小僧・其の三」(脚本演出・劇団わくわく)を。また神戸ではダウン症児童などで構成された**ミュージカル劇団ルーチアットステラ321**が8月、神戸文化ホール大ホールで第4回公演「ヴィランズの子供たち」(構成演出振付・大西正人)を上演。純真な王子と邪悪な魔法使いの子供たちの交流を描いたオリジナル。俳優で

現在は大阪芸大短大教授をつとめる加納竜が監修・指導にあたり、王様役でも出演した。

### コロナ乗り越え続々復活

コロナ禍で中止や延期を余儀なくさせられていた各種演劇祭やイベントが徐々に復活。大規模の演劇祭では「ふじのくに⇄せかい演劇祭」が3年ぶりにブルガリアやフランスなど海外の劇団が参加して4月29日～5月8日、静岡芸術劇場舞台芸術公園などで開催され、また4年に一度開催の「とよま世界子ども舞台芸術祭」が日本を含むベトナム、チェコ、カナダ、ベルギー、ハンガリーなど10ヵ国69団体が参加して7月30日～8月3日、富山県民会館や高岡文化ホールほかで開催された。

2年ぶり開催の「豊岡演劇祭2022」は9月15～25日に兵庫県豊岡市や養父市を中心に山海塾など9団体、公募のフリンジプログラムは約60団体が参加、芸術文化観光専門職大学静思堂シアターや豊岡市民会館、歌舞伎上演機構を備えた出石永楽館などで開かれた。同演劇祭実行委員会の発表によると来場者は前回(2020年)の3倍、約1万8千人、経済普及効果はほぼ1億3千万円にのぼるといふ。

自然環境の中で展開する小さな国際演劇祭「松江・森の演劇祭」(園山土筆芸術監督＝劇団あしぶえ主宰)は5年ぶり。11月上旬の5日間、ブルガリア、フランス、カナダ、日本の10団体が日本一小さな公立劇場・しいの実シアター(約100席)など4会場で行われた。

とはいえコロナ禍による公演中止・延期も少なくない。四国こんぴら歌舞伎大芝居は金丸座の南海トラフ地震対策としての改修工事もあったが、20年(令和2年)から3年続けて開催を見送り、全国公立文化施設協議会(野村萬斎会長)の公文協・松竹歌舞伎営業は20年以来、3年連続しての中止。片岡愛之助を座長に続けてきたシスティーナ歌舞伎(大原国際美術館システィーナホール)は21年に続き22年・23年も開催中止となった。

コロナと関係はないが、市川猿翁のスーパー歌舞伎「オグリ」などで知られる神奈川県藤沢市の遊行寺伝説をテーマに据えた演劇集団・遊行舎による市民劇「遊行かぶき」が9月末から3日間、藤沢市湘南台市民シアターで代表作「小栗



判官と照手姫」(脚本演出・白石征)を上演して26年の歴史に幕を閉じた。

### 文化拠点の相次ぐ開館

22年も新劇場が次々にオープンしている。秋田県の芸術・文化の拠点「あきた芸術劇場・ミルハス」(2007席の大ホール、800席の中ホール、2つの小ホール)が9月にグランドオープン。神戸では「なでしこ芸術文化センター・西神中央ホール」(500席)が10月、こけら落とし公演を行って開館。北国では富山・高岡市に北國新聞社高岡会館が5月に開館したが、3階に160席のホールを持つ。

また23年の開館になるが、4月に民間資本(一般財団法人メニコン芸術文化記念財団)の「メニコンシアターAoi」(301席)が名古屋の繁華街・今池近くに完成予定。同財団はすでに110席の音楽中心の多目的劇場「HITOMIホール」を有し、同地域を「エンターテインメントのメッカに」と芸術による地域活性化を目指す。また富山駅前に建設中のDタワー(仮称)に富山市の中規模ホール(652席)が8月に開館予定。札幌では田中記念劇場財団による演劇専用劇場「北八劇場」(226席)が24年春にお目見え。

新設ではないが、劇団四季が1996年以来(一時期中断も)、九州の拠点として専用劇場に使用した福岡市博多区の「キャナルシティ劇場」(1144席)が7月に新体制でリニューアルオープン。運営にはサンライズプロモーション東京(高橋一仁代表取締役)、キョードー西日本(本社・福岡市、倉田哲伸代表取締役)、イーティックスデータファーム(本社・東京、原田栄二代表取締役)の3社が「総合エンターテインメントシアターへの転換」を目的として3月にシアターマネージメント福岡(松崎聡代表取締役)を設立。それぞれエンタメ界では実績があり、7月1日に梅若実・野村萬斎による「祝能」でスタート、すでにサンライズプロモーション東京が2003年以来上演を続け、通算2000回(観客動員300万人)という人気ミュージカル「テニスの王子様」、パルコ・プロデュース公演など多彩な企画で劇場活動を再開している。福岡では博多座とともに、大劇場として今後の成果が目される。

やや異例というか石川県小松市の石川県こ

まつ芸術劇場うらら(本花道付き851席の大ホール、音楽系の250席の小ホール)が23年3月4・5日に予定されている13代目市川團十郎襲名披露公演に合わせて「團十郎芸術劇場うらら」へと名称変更。このほか可動床システムを持つ岐阜市のぎふ清流文化プラザ長良川ホールが花道と升席(6枠24席)を設置、県民芝居小屋「ぎふ清流座」の名称を冠して地歌舞伎公演に対応、5月から県内各座による「清流の国ぎふ 地歌舞伎勢揃い公演」が始まった。

劇場ではないが紀州を舞台にした「華岡青洲の妻」「紀ノ川」など数多くの名作・戯曲を書いた有吉佐和子記念館(恩田雅和館長＝元和歌山放送プロデューサー)が3月、和歌山市の紀の川近くに開館した。東京・杉並区の旧居を一部復元して建てられたもので、原稿を執筆した机や椅子、愛用の万年筆などゆかりの品々を配置した書齋も再現。和歌山市立の施設だが、建設には民間篤志家が総工費の大半を拠出したという。名作朗読劇場など著作にちなんだイベントなどが開催されている。

### 相次ぐ芸術監督、プロデューサー就任

2024年春、札幌駅前にオープンする「北八劇場」の芸術監督に劇団イレブン☆ナイン(札幌市)の俳優・劇作・演出家の納谷真大が就任する。北海道では札幌演劇シーズンなどを企画製作する北海道演劇財団の芸術監督に劇団清水企画の劇作・演出家、札幌座ディレクターの清水友陽が4月に就任している。

水戸芸術館(小澤征爾館長)も4月にシアターコクーンのプロデューサー岡本由紀夫が演劇部門の芸術監督に。23年9月開館の岡山芸術創造劇場のプロデューサーに銀座セゾン劇場や渋谷Bunkamuraなどの開設に携わり、彩の国さいたま芸術劇場ゼネラルアドバイザーの渡辺弘が就任。23年1月に世界劇団(愛媛・東温市)代表の本坊由華子が津あけぼの座(三重・津市)のプログラムディレクターに。メニコンシアターAoiでは芸術監督にトリコ・Aプロデュース、サファリ・Pを主催する京都の劇作・演出家、女優の山口茜が決定した。

中京・関西の話題を。11月、名古屋圏で小劇場の聖地、メッカとされる名古屋市中須の**七ツ寺共同スタジオ**が50周年を迎え、記念公演「夢

の肉弾三勇士」(流山児祥原作、鹿目由紀脚色、渡部剛己演出)を上演。同スタジオのこけら落とし公演(1972年9月)に上演された作品で、鹿目の劇団あおきりみかん、渡部の体現帝国をはじめ多数の地元劇団が出演・スタッフで協力。コロナ禍で上演は5回にとどまったが、残る日数を舞台映像公演として完演した。

大阪を本拠に1952年から演劇活動、関西芸術座の創立メンバーでテレビ「水戸黄門」など幅広い活動が続けてきた96歳の河東けいが9月、兵庫県立ピッコロシアターでライフワークのひとり語り「母～多喜二の母」(三浦綾子原作、ふじたあさや脚本・演出)をもって70年の舞台第一線から退いた。河東はW・ギブソンの「奇跡の人」に教師アニー・サリバン役を600回以上演じている。

地域に根差し活動を続ける地域劇団・市民劇場。創立60周年、70周年の記念公演を迎えた劇団も少なくない。そんな足跡の一端。

**【1月】**6日・劇団支木(青森市)が青森市民ホールで「魔笛」(田辺典忠作・演出)を、13～15日・関西芸術座(大阪市)がABCホールで「たこ焼きの岸本」(蓮見恭子原作、勇来佳加脚色、松本昇三演出)を。23日・仙台小劇場(仙台市)が広瀬文化センターで飛び出す紙芝居劇場版「アーリー博士とレイト怪人」(石垣政裕作・演出)を上演。

**【2月】**1～6日・バイソナー(札幌市)が教育文化会館小ホールで「ワタシの好きなぼうりょく」(川尻恵太脚本、山田マサル演出)、22、23日・劇団P.Sみそ汁定食(愛媛・砥部町)がシアターねこで「巡る、母桜」(桝形浩人作・演出)を上演。17～20日・北九州芸術劇場(福岡・北九州市)がクリエーションシリーズ第1作「まつわる紐、ほどけば風」(岩崎正裕作・演出)を。

**【3月】**24～27日・劇団名芸(名古屋市)が劇団アトリエで創立60周年記念公演「二十二夜待ち」(木下順二作、しものみさえ演出)を、26日・劇団らくりん座(栃木・那須塩原市)が芳賀町民会館ホールで創立70周年記念公演「いっしょにいこうよ」(D.ホールマン作、印南真人演出)を。26、27日・劇団若者座(山口・宇部市)が宇部市文化会館で合同公演「フォー・ウィメン～宇部100年物語」(広島友好作・演出)を上演。

**【4月】**9、10日・劇団はぐるま(岐阜市)が御

浪町ホールで「ねこはしる」(工藤直子作、汲田正子演出)、17日・劇団やまなみ(山梨・北杜市)が笛吹市スコープセンターで「また会える日に」(水木亮作、河野通方演出)を。

**【5月】**22日・劇団静芸(静岡市)が「ちびっこ魔女のぼうけん」(プロイスラー原作、小原輝夫脚色、中川正臣演出)を、27～29日、6月3～5日・劇団未来(大阪市)が未来ワークスタジオで創立60周年記念公演「川向う」「橋の下のガタロ」(和田澄子作、しまよしみち演出)を。28、29日・劇団夜明け(岐阜・中津川市)が地歌舞伎小屋・常盤座で「林芙美子と島崎こま子」(井上ひさし作「太鼓たたいて笛ふいて」より鈴木弘文台本・演出)を。

**【6月】**4日・仙台小劇場(仙台市)がエル・パーク仙台ギャラリーホールで「DANDANおんだんか」(石垣政裕作・演出)を、17～19日、24～26日・劇団大阪(大阪市)が谷町劇場で創立50周年記念公演「医者の子玉」(岡田鉄兵作、熊本一演出)を上演。11、12日・劇団フジ(大阪・東大阪市)が布施PEベースで「おとな食堂」(四方京作、齋藤順子演出)、18、19日・劇団120 Oen(福島市)が福島市写真美術館でイマージシアター「花ノ寫真館」(清野和也ほか原案、清野和也演出)を。

**【7月】**2、3日・劇団どろ(神戸市)が新長田小劇場で「父と暮せば」(井上ひさし作、合田幸平演出)、8～10日・劇団ドラマシアターども(北海道・江別市)がドラマシアターIVで「夜学パート2」(批本享洋作・演出)を。8～10日・劇団名古屋(名古屋市)が劇団けいこ場で創立65周年記念公演「渡る人～星降る島からの報告」(ごとうてるよ作、久保田明演出)を上演。12～15日・無名劇団(大阪市)があべのハルカスSPA CE9で「プラズマ」(中條岳青作、島原海夏脚色・演出)、16、17日・演劇集団☆遼遷(大阪市)がT-6で「薔薇の牢獄」(和泉めぐみ作・演出)、16、17日・劇団市民舞台(熊本市)が熊本市国際交流会館で「風邪の神送り～うどんとおくりの令和あれんじ」(構成脚色演出・松本真奈美)を、30日・劇団すがお(三重・桑名市)が桑名市総合福祉会館で創立60周年記念公演「命の事情2～空襲77周年・桑名記憶館物語」(篠原史紀作・演出)をそれぞれ上演。

**【8月】**6～9日・アクティブハカタ(福岡市)

がベイサイド・ライブホールでプロデュース公演「サダコ〜折り鶴の少女」(たいらまさお作、伊集院晃生構成・演出)、27日・**劇団四紀会**(神戸市)が神戸女学館ホールで「芝浜の革財布」(三遊亭月朝作、石川三吉脚色、村井伸二演出)を。

【9月】2、3日・**劇団山形**(山形市)が中央公民館ホールで「太陽のあたる場所」(堤泰之作、平野礼子演出)、3、4日・**劇団こふく劇場**(宮崎・都城市)が宮崎・門川町総合文化会館でプロデュース公演「テンペスト」(シェークスピア原作、松岡和子訳、永山智行構成・演出)を上演。9～11日・**劇団せすん**(大阪市)が大阪グリーン会館ホールで「GO!STOP!～天六奇譚」(湖やしろ作、ZERO演出)、9～11日・**関西芸術座**(大阪市)がABCホールで「晴れたらいいね」(藤岡陽子原作、宮地仙脚色、門田裕演出)を上演。9～16日・**札幌座**(札幌市)・道産子男闘呼俱樂部(東京)がシアターZOOで共同制作公演「五月、忘れ去られた庭の片隅に花が咲く」(鄭義信作・演出)を。

【10月】10、11日・**劇団石**(熊本・益城町)が熊本市健軍文化ホールで「裸でスキップ」(鈴木聡作、邑木みほ演出)、14、15日・**劇団やませ**(青森・八戸市)が八戸市公民館で「炎と水と」(佐々木功作・演出)を。14、15日・**劇団息吹**(東大阪市)が東大阪イコーラムホールで「けつたいな陣羽織」(木下順二原作、坂手日登美潤色・演出)、15、16日・**演劇集団和歌山**(和歌山市)が県民文化会館ホールで「七人の墓友」(鈴木聡作、山入桂吾演出)を上演。

【11月】3～6日・**劇団四紀会**(神戸市)が元町ブチシアターで「市長さんと街の人々」(別役実原作、桜井敏脚色、岸本敏朗演出)を。4～6日、11～13日・**劇団未来**(大阪市)が未来ワークスタジオで創立60周年記念公演「パレードを待ちながら」(ジョン・マレル作、吉原豊司訳、しまよしみち演出)、10～13日・**ギンギラ太陽's**(福岡市)が西鉄ホールで「ドラッグストア大戦争～健康は俺が守る!」(大塚ムネト脚本・演出)を上演。11～13日、18～20日・**劇団大阪**(大阪市)が谷町劇場で創立50周年記念公演「空蟬が鳴いている」(山脇立嗣作、山内佳子演出)、12、13日・**劇団弘演**(青森・弘前市)が岩木文化センターで「さる梨とり」「三まいのおふだ」(高坂純脚本、作問しのぶ演出)を。12、13日・**東北幻野**

(山形・新庄市)が新庄市民文化会館大ホールで「十一人の少年」(北村想作、海藤富美演出)を。13日・**劇団からっかぜ**(浜松市)がクリエート浜松で「フユヒコ」(マキノノゾミ作、布施佑一郎演出)、18～20日・**劇団支木**(青森市)がアウガAV多目的ホールで「市長の油断」(田辺典忠作・演出)、26、27日・**劇団名芸**(名古屋市)が天白文化小劇場で創立60周年記念公演「ベニスの商人」(シェークスピア作、栗木英章脚本、しものみさえ演出)をそれぞれ上演。

【12月】2、3日・**ゆざ演劇研究会**(山形・遊佐町)が遊佐生涯学習センター・ホールで「片づけたい女たち」(永井愛作、本間知広演出)を、3、4日・**岡崎演劇集団**(愛知・岡崎市)が岡崎市図書館交流プラザLibraホールで「王子さまの梅干し」(小川未玲作、石川雅彦演出)を。9日・**劇団HIT! STAGE**(長崎・佐世保)がアルカスSAS EBOで創立25周年記念公演「春待つ鯨」(森聲由作、有門正太郎演出)、17・18日・**劇団津濱**(三重・津市)がリージョンプラザお城ホールで「北の写真師～土方歳三を撮った男」(西田久光作、山本賢司演出)、24、25日・**劇団すがお**(三重・桑名市)が桑名市総合福祉会館で創立60周年記念公演「弔いのクリスマスパーティー～旭ビルと桑名チンチン電車物語」(篠原史紀作、石垣まさし演出)を上演。

もり・ようぞう

演劇ライター・評論研究。1941年大阪市生まれ、早大文学部卒。1964～2006年、中日新聞・東京新聞(放送芸能部長、編集委員)勤務。文化庁芸術祭審査委員、国立劇場歌舞伎公演専門委員等を歴任。日本演劇協会、藝能学会会員。松尾芸能賞選考委員

[テレビ・ドラマ]

## 話題作が示したジャンルの新たな可能性

中町綾子

話題作に恵まれた1年だった。この1年に限ったことではないが、放送時間に視聴するリアルタイム視聴だけでなく、インターネットでの見逃し配信など配信プラットフォームでのタイムシフト視聴が一般的となり、番組の見られ方がますます変化した。また、それに伴い話題の拡散力が以前とは異なる形で高まっている。2022年は、話題喚起力の高い作品の存在感がよりいっそう強く感じられた。

NHKの大河ドラマ『鎌倉殿の13人』は、1月にスタートして12月の最終回まで、1話1話が濃密で、常に注目を集めた。連続テレビ小説の『カムカムエヴリバディ』(2021年11月～2022年4月)、『ちむどんどん』(2022年4月～9月)もSNSでの盛り上がりを見せ話題を振りまいた。

上述の変化は、既存のジャンルに新風を吹き込むものでもあった。民放の連続ドラマでは、1年を通じてバリエーション豊かな作品が放送された。サスペンス、ミステリーである『ミステリと言う勿れ』(フジテレビ、1月～3月)、ラブストーリーの『Silent』(フジテレビ、10月～12月)、ホームドラマの『妻、小学生になる。』(TBS、1月～3月)、弁護士もの(リーガルドラマ)の『石子と羽男—そんなコトで訴えます?—』(TBS、7月～9月)などである。いずれも表現の新鮮さが話題を喚起した。

テレビドラマがあらたに切り開いたジャンルの魅力を中心に1年を振り返る。

### ●連続ドラマの注目作

1月期の連続ドラマでは、TBSのホームドラマの金曜ドラマ『妻、小学生になる。』と、東海テレビのホームドラマ『おいハンサム!!』が注目された。『妻、小学生になる。』(TBS、1月21日～3月25日、全10話)は、新島圭介(堤真一)と娘・麻衣(蒔田彩珠)のもとに亡くなった妻(母)の貴恵(石田ゆり子)の魂(と記憶)をもった10歳の小学生・白石万理華(毎田暖乃)が現れることから始まる異色のファンタジックホームドラマ

だった。貴恵の死後、抜け殻となって暮らしていた二人が、小学生の体を借りた貴恵と触れ合い、そのポジティブな言動に励まされることで、あらためて前を向く過程が家族の温もりの中に描かれた。万理華の母・千嘉(吉田羊)との関係の描写にも、家族と関わることの難しさや大切さが描かれ、重層的な見どころのある作品となっていた。(脚本=大島里美、演出=坪井敏雄、山本剛義ほか、プロデュース=中井芳彦ほか、原作=村田椰庭)

**土ドラ『おいハンサム!!』**(東海テレビ、1月8日～26日、全8話)は、オーソドックスなコメディタッチのホームドラマを、現代的な価値観に通じるメッセージへとみごとに変換させた。頑固で情に厚く、ダンディで憎めない父・伊藤源太郎(吉田鋼太郎)と肝のすわった母・千鶴(MEG UMI)が、男運のない三姉妹(木南晴夏、佐久間由衣、武田玲奈)を温かく見守る。個人の問題をどう家族と分かち合うか、どう家族として関わるか、そのバランス感覚が心地よいものとして描かれていた。俳優陣はそれぞれの役どころを説得あるものとして好演した。(脚本・演出=山口雅俊、原作=伊藤理佐、企画=市野直親、東京ドラマアウォード2022長編ドラマ部門優秀賞、2022年日本民間放送連盟賞番組部門テレビドラマ・優秀)

**『ミステリと言う勿れ』**(フジテレビ、1月10日～3月28日、全12話)は、人気漫画が原作のミステリードラマだ。大学生の久能整(菅田将暉)は、同級生を殺害した容疑で警察の取り調べを受けたことがきっかけで事件の捜査に協力するようになる。その鋭い観察眼、優れた洞察力で、事件を解決に導く過程が緊張感をもって描かれた。関係者の会話やしぐさを巧みに繋ぎ合わせ、理路整然と真相に迫る主人公を、菅田が淡々とした語り口で演じ、漫画の世界を巧みに映像化した。(脚本=相沢友子、演出=松山博昭、品田俊介ほか、原作=田村由美、東京ドラマアウォード2022長編ドラマ部門優秀賞、主演男

優賞＝菅田将暉、2022年日本民間放送連盟賞番組部門テレビドラマ・優秀)

**よるドラ『恋せぬふたり』**(NHK、1月10日～3月21日、全8話)は、アロマンティック・アセクシュアルの2人の同居生活を描いたオリジナルドラマだ。兒玉咲子(岸井ゆきの)は、他者に恋愛感情をもたず(アロマンティック)、性的にひかれぬ(アセクシュアル)。そんな彼女が、恋愛もセックスもしたくない男性・高橋羽(さとる・高橋一生)と出会って同居をはじめ。恋愛によらない男女の人間関係を、咲子に思いを寄せる同僚(濱正悟)や彼女のもとを去った友人(小島藤子)との関係のなかに描き、多様な生き方を示した。(作＝吉田恵里香、演出＝野口雄大、押田友太、土井祥平、制作統括＝尾崎裕和、プロデューサー＝大橋守、上田明子、令和4年度文化庁芸術祭テレビドラマ部門優秀賞、第59回ギャラクシー賞テレビ部門特別賞、吉田恵里香が本作で第40回向田邦子賞を受賞)

そのほか、1月期のドラマでは、**日曜劇場『DCU』**(TBS、1月16日～3月20日、全9話)が話題になった。海上保安庁の潜水特殊捜査隊・DCU (Deep Crime Unit)は、海の犯罪を解くエキスパート集団である。番組は、イスラエルのメディア会社・ケシエット・インターナショナル、カナダを中心にコンテンツ製作を行うファセット4メディアとTBSテレビの共同制作だった。(脚本＝青柳祐美子、小谷暢亮ほか、演出＝田中健太、青山貴洋ほか、製作総指揮＝貴島誠一郎、プロデューサー＝伊與田英徳ほか)

4月期では、**日曜劇場『マイファミリー』**(TBS、4月10日～6月12日、全10話)の視聴率が好調だった。「ノンストップファミリーエンターテインメント」と謳ったオリジナルドラマで、夫婦(二宮和也、多部未華子)が娘の誘拐事件の解決に奔走する姿を追い、家族の絆を描いた。犯人の要求にどう対応するかをめぐり、家族の絆が試される。この2重の構造がドラマをスリリングなものにしていた。(脚本＝黒岩勉、演出＝平野俊一、田中健太ほか、プロデューサー＝飯田和孝ほか、スーパーバイジングプロデューサー＝那須田淳)

7月期放送の**金曜ドラマ『石子と羽男—そんなコトで訴えます?—』**(TBS、7月15日～9月16日、全10話)は、町の人に寄り添ういわゆる「マ

チベン」に持ち込まれるトラブルをめぐるドラマだ。タイトルのとおり、「そんなコトで訴えます?」という困りごとを、司法試験に4回落ちた東大卒のパラリーガルの硝子(通称・石子)(有村架純)とフォトグラフィックメモリーという記憶能力で司法試験に一発合格した高卒の弁護士(自称・羽男)(中村倫也)の二人が解決する。大きな訴訟を弁護するリーガルものとは異なり、依頼人たちの人間模様を描き身近に引き寄せた司法を描いた点が新鮮で気持ちよいドラマだった。(脚本＝西田征史、演出＝塚原あゆ子ほか、プロデューサー＝新井順子、ギャラクシー賞9月度テレビ部門月間賞、第60回ギャラクシー賞上期テレビ部門奨励賞)

**夜ドラ『あなたのブツが、ここに』**(NHK大阪、8月22日～9月29日、1話15分全24話)は、大阪・尼崎を舞台にコロナ禍の暮らしを描いたヒューマンドラマだった。2020年の10月、キャバクラで働いていたシングルマザーの山崎亜子(仁村紗和)は、常連客だった運送会社社長の葛西(岡部たかし)の誘いで宅配ドライバーを始める。慣れない仕事をひとつひとつこなしながら日々を送る。そんな当たり前の営みをしっかりと見せ、時代の空気をリアリティをもって伝えた。(脚本＝櫻井剛、演出＝盆子原誠、柳川善郎、佐原裕貴、制作統括＝櫻井壯一ほか、プロデューサー＝橋爪國臣、エンディングテーマ＝ウルフルズ「バカサバイバー」、ギャラクシー賞9月度テレビ部門月間賞、第60回ギャラクシー賞上期テレビ部門入賞)

**土曜ドラマ『一橋桐子の犯罪日記』**(NHK、10月8日～11月5日、全5話)は、76歳の独身女性・一橋桐子(松坂慶子)が主人公のコメディ・ヒューマンドラマという点で異色だった。桐子は、同居していた親友の知子(トモ)に先立たれ、独りぼっちとなる。そんな彼女が、服役すれば刑務所では生活に困らず、独りぼっちではないと、なるだけ人に迷惑をかけない犯罪を画策する。詐欺や、狂言誘拐、自殺ほう助を試みるが、ことごとくうまくいかない。その画策のなかで出会う人たちとのふれあいが温かく描かれた。ファンタジーとも言えるが、世代を超えた交流がすがすがしいドラマだった。(脚本＝ふじきみつ彦、演出＝笠浦友愛ほか、制作統括＝高橋練ほか、原作＝原田ひ香)

10月期には、恋愛ドラマ『**Silent**』（フジテレビ、10月6日～12月22日、全11話）が、TVerのお気に入り登録者数などで話題を呼んだ。高校時代に交際していた二人が、8年後、街で偶然に再開するところから始まるラブストーリーだ。佐倉想（日黒蓮）は若年発症型両側性感音難聴を患い耳が不自由になっていた。音羽紬（川口春奈）はそのことを知って、手話を学び彼への思いを伝えていく。相手を大切に思うこと、思うようにいかず傷つくこと、その思いのひとつひとつを周囲の人の気持ちを交えて浮かび上がらせる。恋や青春のなかにある感情の機微を掬いあげる脚本（セリフ）、演出（映像表現）、演技で近年のテレビドラマにはない抒情的なラブストーリーだった。（脚本＝生方美久、演出＝風間太樹ほか、プロデュース＝村瀬健、主題歌＝Official髭男dism「Subtitle」、ギャラクシー賞12月度テレビ部門月間賞）

『**エルピス—希望、あるいは災い—**』（関西テレビ、10月24日～12月26日、全10話）は、冤罪と報道をテーマにした社会派サスペンスドラマだった。民放テレビ局アナウンサーの浅川恵那（長澤まさみ）は、ディレクターの岸本拓朗（眞栄田郷敦）から連続殺人事件の死刑囚が冤罪ではないかと相談される。真相を追ううちに、政界を巻き込んだ疑惑が浮上する。テレビ業界を舞台に、正義や職業倫理を問う挑戦的なドラマだった。長澤、眞栄田をはじめ俳優陣の熟演が光った。（脚本＝渡辺あや、演出＝大根仁ほか、プロデュース＝佐野亜裕美、ギャラクシー賞12月度テレビ部門月間賞）

そのほか、10月期のドラマでは、**水曜ドラマ『ファーストペンギン！』**（日本テレビ、10月5日～12月7日、全10話）が、注目された。港町に移り住んだシングルマザーの岩崎和佳（奈緒）が、地元の漁師の片岡洋（堤真一）と出会い、鮮魚直売事業「お魚ボックス」の収益化に奮闘する。実話をモデルにしたサクセスストーリーで、地域の産業を舞台にした点が新鮮だった。（脚本＝森下佳子、演出＝内田秀実、小川通仁ほか、チーフプロデューサー＝三上絵里子、プロデューサー＝森雅弘ほか、原作＝坪内知佳）

## ●年間を通じた話題作

**NHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』**（NHK、1月

9日～12月18日、全48話）は、大河ドラマ三作目となる三谷幸喜の圧倒的な脚本による充実の作品だった。鎌倉幕府二代執権・北条義時（小栗旬）を主人公として、幕府の人間模様を描く。歴史の局面における幕府内の人間関係の心の機微を余すことなく描いた異色の大河ドラマで、ひとりひとりの登場人物が魅力的な存在感を放っていた。（脚本＝三谷幸喜、演出＝吉田照幸、末永創ほか、制作統括＝清水拓哉、尾崎裕和、ギャラクシー賞12月度テレビ部門月間賞）

『**カムカムエヴリバディ**』（NHK大阪、2021年1月1日～2022年4月8日、全112話）は、ラジオから流れてくる英語の響きに魅せられた橘安子（上白石萌音）と、その娘の雉真るい（深津絵里）、孫の大月ひなた（川栄李奈）の三代の物語をリレーし、1925年から2025年までの100年間を描いた。主人公たちは、和菓子、ラジオの英会話講座、戦争、ジャズ、時代劇にかかわっていく。個人史を通して日本の文化史や国際交流などを描き出した。説得力のあるエピソードの構築は、連続テレビ小説のスケールメリットを活かすものだった。（作＝藤本有紀、演出＝安達もじり、橋爪紳一朗ほか、制作統括＝堀之内礼二郎ほか、東京ドラマアウォード2022連続ドラマ優秀賞、助演男優賞＝オダギリジョー、脚本賞＝藤本有紀、主題歌賞＝AI「アルデバラン」、第48回放送文化基金賞・奨励賞＝NHK大阪放送局、脚本賞＝藤本有紀、ギャラクシー賞4月度テレビ部門月間賞）

また、テレビドラマではないが配信プラットフォームNetflixのコンテンツでも連続ドラマの形態をとる話題作があった。11月に配信がスタートしたNetflixシリーズ『**First Love 初恋**』（11月24日配信、全9話）だ。悲恋に終わった高校時代の初恋から時を経て再開したふたりの物語が、北海道を舞台にせつなく描かれた。（主演＝満島ひかり、佐藤健、八木莉可子、木戸大聖、脚本・監督＝寒竹ゆり、製作総指揮＝坂本和隆、プロデューサー＝八尾香澄）

## ●注目の単発ドラマ

**沖縄本土復帰50年ドキュメンタリードラマ『ふたりのウルトラマン』**（NHK、5月2日）は、円谷プロで「ウルトラマン」の製作に携わった沖縄出身の二人の脚本家を描く。今から50年前、上

原正三(佐久本宝)は、アメリカ統治下の沖縄からパスポートをたずさえて上京する。迎えたのは、すでに『ウルトラQ』の脚本を執筆していた同郷の金城哲夫(満島真之介)だった。大ヒットした「ウルトラマン」の当時の制作現場の熱気と金城、上原らの意気込みが、ドキュメンタリーでの証言インタビューも交えて伝えられた。作品づくりにかける思いの一方での苦悩もまた多くを考えさせる。脚本・監督は沖縄在住の映画監督・中江裕司が手掛けた。(東京ドラマアウォード2022単発ドラマアウォード優秀賞、ギャラクシー賞5月度テレビ部門月間賞)

**スペシャルドラマ『津田梅子〜お札になった留学生〜』**(テレビ朝日、3月5日)は、2024年に発行される新紙幣に肖像が描かれる津田梅子の青春をたどった。明治4年に日本初の女子留学生としてわずか6歳でアメリカに渡った津田梅(広瀬すずほか、梅は幼名)が、女子教育の先駆者として、その思いを成し遂げる姿を描いた。(脚本=橋部敦子、監督=藤田明二、エグゼクティブ・プロデューサー=内山聖子、プロデューサー=神田エミイ垂希子ほか、東京ドラマアウォード2022単発ドラマアウォード優秀賞)

**国際共同制作ドラマ『ミスモールランド』**(NHK、3月24日)は、第72回ベルリン国際映画祭アムネスティ国際映画賞・特別表彰を受けた映画「ミスモールランド」(5月6日公開)のテレビドラマ版として放送された。幼いころから日本で育ったクルド人の女子高生・チョーラク・サーリヤ(嵐莉菜)の生活は、ある日突然在留資格を失い一変する。クルド人は“国を持たない世界最大の民族”と言われ、共存する場所で差別や迫害にあい故郷から追われている。埼玉県には約2000人が暮らす、いつ強制退去を命じられるかわからず毎日を送っている。そんな状況を一人の少女と日本人の少年・崎山聡太(奥平大兼)との交流を軸に身近なものとして描いた。民族とは何か、アイデンティティとは何かをみつめさせる青春ドラマだった。(作・演出=川和田恵真、制作統括=藤並英樹、東京ドラマアウォード2021単発ドラマアウォード優秀賞)

## ●高視聴率のドラマ

2022年1月1日～12月31日に放送された、15

分以上の番組を対象とした、「ジャンル別個人視聴率ランキングベスト3/ビデオリサーチ視聴率2022年【まとめ】」(関東地区)のテレビドラマの上位3番組は、以下の通りだった。

**1位『カムカムエヴリバディ』**(11.2%、NHK、4月8日放送回)、**2位『鎌倉殿の13人』**(10.6%、NHK、1月9日放送回)、**3位『DCU』**10.3%、TBS、1月16日放送回)、**『マイファミリー・最終回』**(10.3%、TBS、6月12日放送)。

また、同資料によれば、「ターゲット×ジャンル別視聴率ベスト3」として、女性20～34歳のドラマ視聴率ランキングを紹介しているが、1位は、『Silent』(7.6%、フジテレビ、12月15日放送回)で、以下『ミステリと言う勿れ』(7.3%、フジテレビ、1月24日放送回)と『真犯人フラグ・真相編・最終回』(7.2%、日本テレビ、3月13日放送)が続いた。※表記は参照元による。

テレビ番組全体で言えば、1位、3位、5位に、FIFAワールドカップ2022(日本×コスタリカ、日本×ドイツ、日本×クロアチア)がランクインしたほか、北京オリンピック関連などベスト10がほぼすべてスポーツ番組で占められた。一方で、放送開始から7日以内でのタイムシフト視聴の実態を集計した「タイム視聴率全ジャンル」では、1位が2021年のヒットアニメ『鬼滅の刃・遊郭編・最終回』(フジテレビ)、7位に同じくアニメの『SPY×FAMILY』がランクインしたほかは2位の『ミステリと言う勿れ』をはじめとしてすべてドラマが占めた。

参照元: ビデオリサーチホームページ「2022年のテレビ視聴率総まとめ【完全版】!よく見られたテレビ番組は?」2023年1月12日ニュースリリース、参照URL <https://www.videor.co.jp/press/2023/230112.html>、ビデオリサーチの許諾を得て掲載。

なかまち・あやこ

日本大学芸術学部教授。文化庁芸術祭執行委員会審査委員、「国際ドラマフェスティバル in TOKYO」東京ドラマアウォード審査委員長など放送関連各賞の審査委員を務める。これまで、日本経済新聞「あのドラマこのセリフ」、読売新聞「アンテナ」など新聞各紙にテレビドラマ評論を執筆。著書に「ニッポンのテレビドラマ21の名セリフ」(弘文堂)ほか。